THE JAPANESE GRAPHIC.

近事畫報

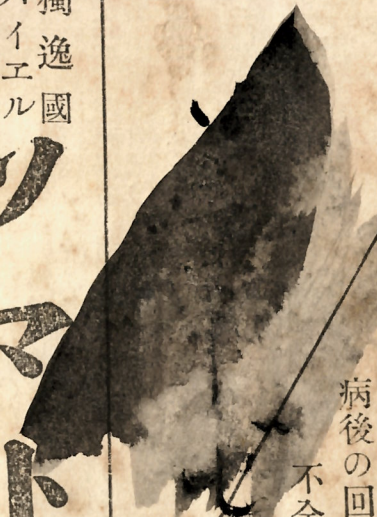
明治三十七年七月廿日　改題

戰時畫報

第十六號

東京發兌

明治三十六年三月九日第三種郵便物認可　毎月三回發行

近事画報社

注意一讀を乞ふ

● 内地及び海外に於る著大の事柄又は奇異珍怪の事物あらば其圖を**投寄**せられんことを切に望む

● 我が數十萬將士の外征の辛苦と、其の戰功とを**寫出**して、國人に**目擊**せしめ之をして**感奮興起**せしむるは、戰時畫報の、自ら任じて本務とする所なり

● 故に、海陸諸軍に關する**戰鬪**の狀況は勿論、其他、戰時の**笑話**又は**苦辛**及び服裝器具に至る迄、苟も國人に知らしめ得べき者は、**誰人**にても、其の**圖畫**を寄稿せられんことを望む

但し右**投寄**せらるゝ畫圖は、**略圖**にて可なり、本社には著名の畫工數多ある故に、忽ち是を精密なる**本圖**に直して掲るなり、故に**素人**の畫にても構ひ申さず候、ほんの**スケッチ**にて不苦候、**畫と名づけ難きほどの粗圖**にても宜しき故に、**投寄**せられんことを乞ふ、(圖は粗にても、之れに、何年何月何日、如何なる塲合の景と、記入あるを要す、本誌の畫圖はなるべく寫實を主とするが故に、年月日地名等の**確實**を要すればなり)

● **野營**中の有樣、又は**艦内**生活の實況、凡そ**何にても注意すれば、畫とならざるもの無し**、又是等外征の辛苦を、國人に知らしむるの必要あればなり

特に、**滑稽笑話**の類も甚だ之を好む、非常なる**辛勞**の事柄も可なり、陣中の**慰事**も可なり、注意すれば、總て畫に入らざるもの無ければなり

● 上記の事柄を**投寄**せられんことは、本誌の切に冀望する所に有之候也

● 投書**宛名**は、本誌編輯主任なる、東京芝區櫻田本鄉町十七番地國木田哲夫方とせられんことを請ふ

社告

大本營陸軍幕僚御藏版發行御許可

戰地寫眞帖 第一卷

▲**本帖**は他に類なき稀世の**珍品**にて(帖の大さ横九寸堅六寸五分クロース綴ぢ金字入り美本)全帖**壹百頁**餘我が**第一軍**の上陸途中**鴨綠江**の**大戰**後迄の實況實寫總計二百五十餘種の中より最も有益にして後世の紀念たるべきもの**壹百五拾餘枚**を精撰せり是れ皆な戰線に出入し死地を履で撮影せしもの彼我大戰の活景眼前に躍々たり眞に其の筋の**御藏版**たるに負かず我邦勃興大戰の**紀念**として**何人**も一帖を子孫に傳へざる可らざるものとす

▲右寫眞は其筋の御藏版にて本社發行の**戰時畫報**中に掲げ難きもの故別に一帖として是れを發行す**戰時畫報**の實寫圖に缺ぐ所は**本帖**を以て補なひ得べく**本帖**に缺ぐ所は**戰時畫報**を以て補なひ得べく兩々相待つて始めて**鴨綠江戰局**の**大觀**を**全**くすべし

定價

一册壹圓貳拾錢　七月十日製本出來(小包料金十五錢 郵劵代用は凡て一割增)

本帖

發行人　東京市京橋區彌左衛門町十五番地(電話新橋一七四二番)　美門商會　北畠忠夫

發賣所　東京市京橋區疊町一番地(電話本局二四四八)　近事畫報社

▲豫約申込所　本社

▲東京　東京堂、東海堂、中西屋、林平二郎、北隆館、丸善　▲大阪　盛文館　名古屋　市川瀬代助　熊本　長崎次郎　福岡　積善館支店

戰時畫報第拾六號目録

繪畫

讀物

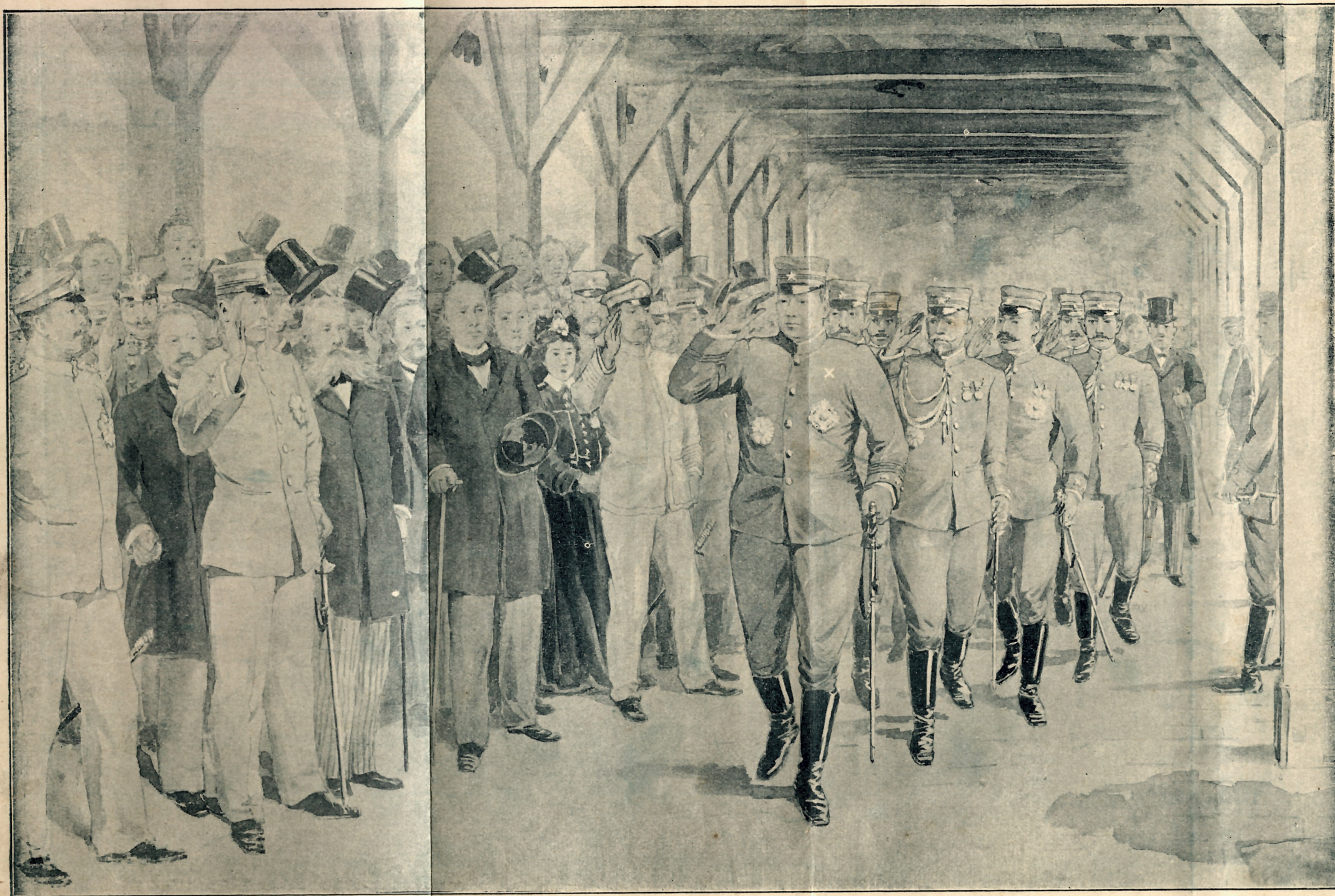
の實況

滿州軍總司令官大山元帥以下が七月六日新橋より出發、停車場のプラットホームにて山縣元帥、桂總理其他內外朝野の人々に送らるゝ光景。

Marshal Marquis Oyama at Shimbash Station. The Marshal is n

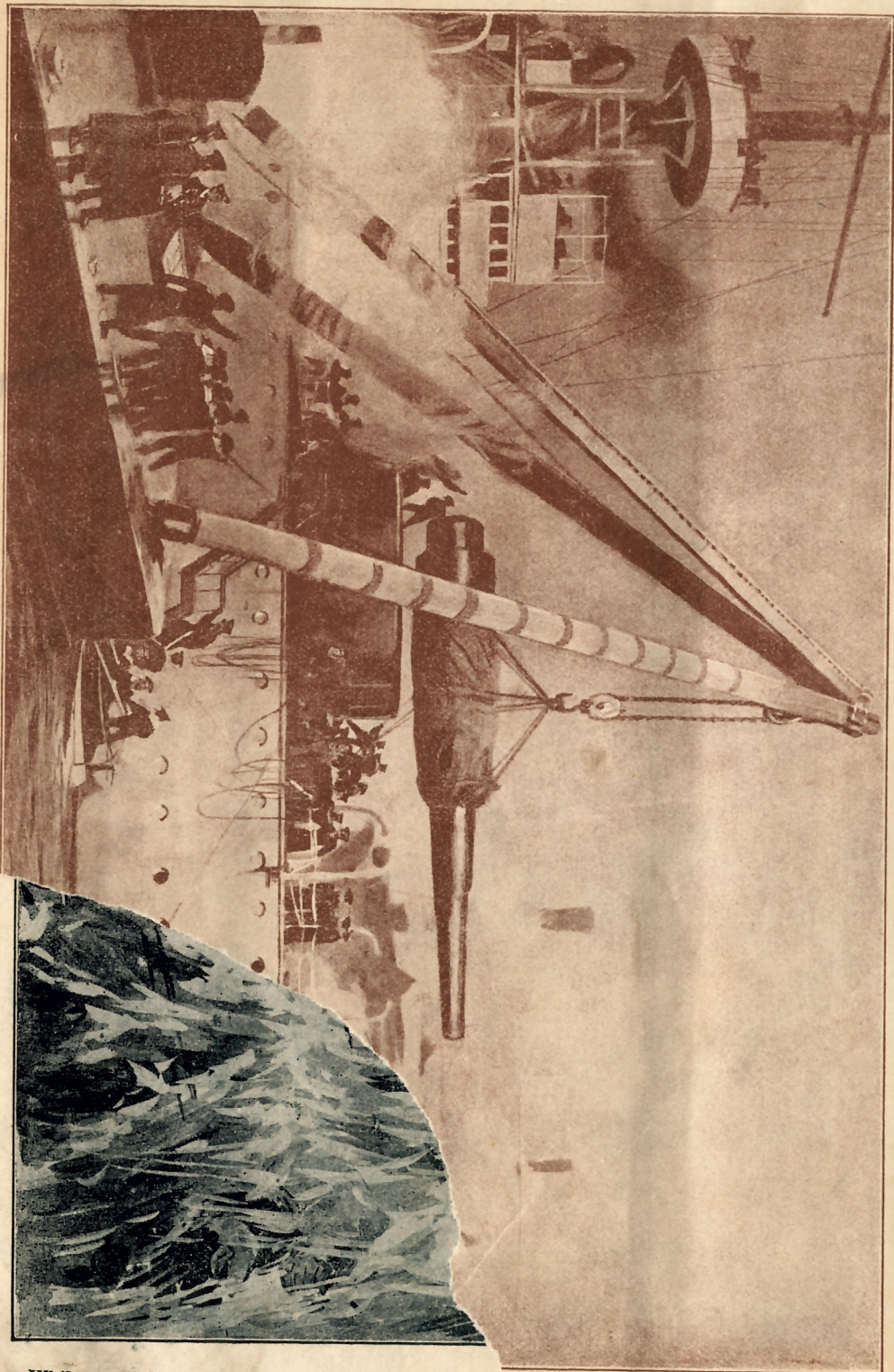
精興舍印行

總司令官の出發、プラットホームの實況

滿州軍總司令官大山元帥以下が七月六日新橋より出發、停車場のプラットホームにて山縣元帥、桂總理其他内外朝野の人々に送らるゝ光景。

Marshal Marquis Oyama at Shimbash Station. The Marshal is marked with a ×.

新興舍印行

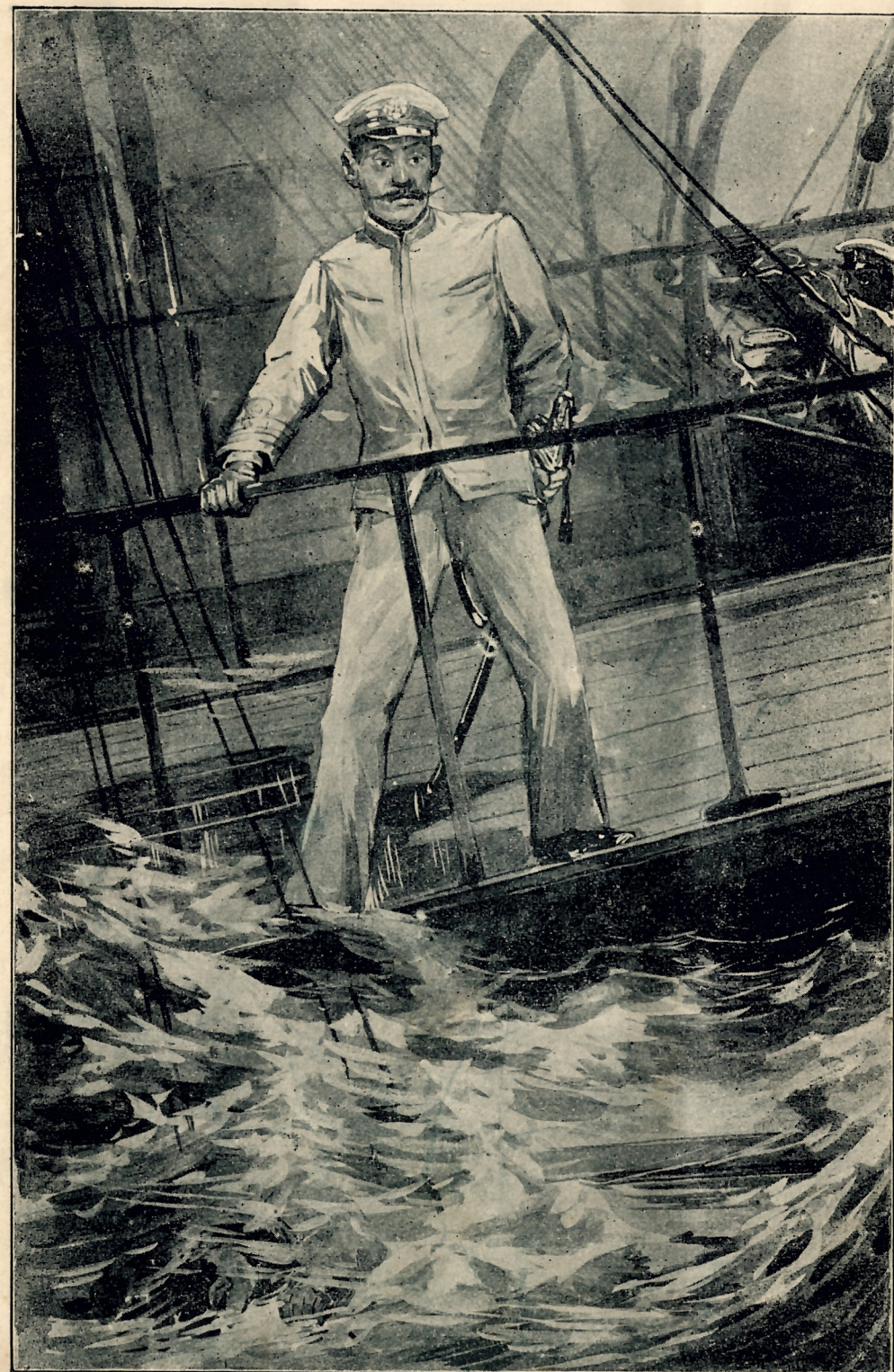
バルチック艦隊極東派遣の準備實況

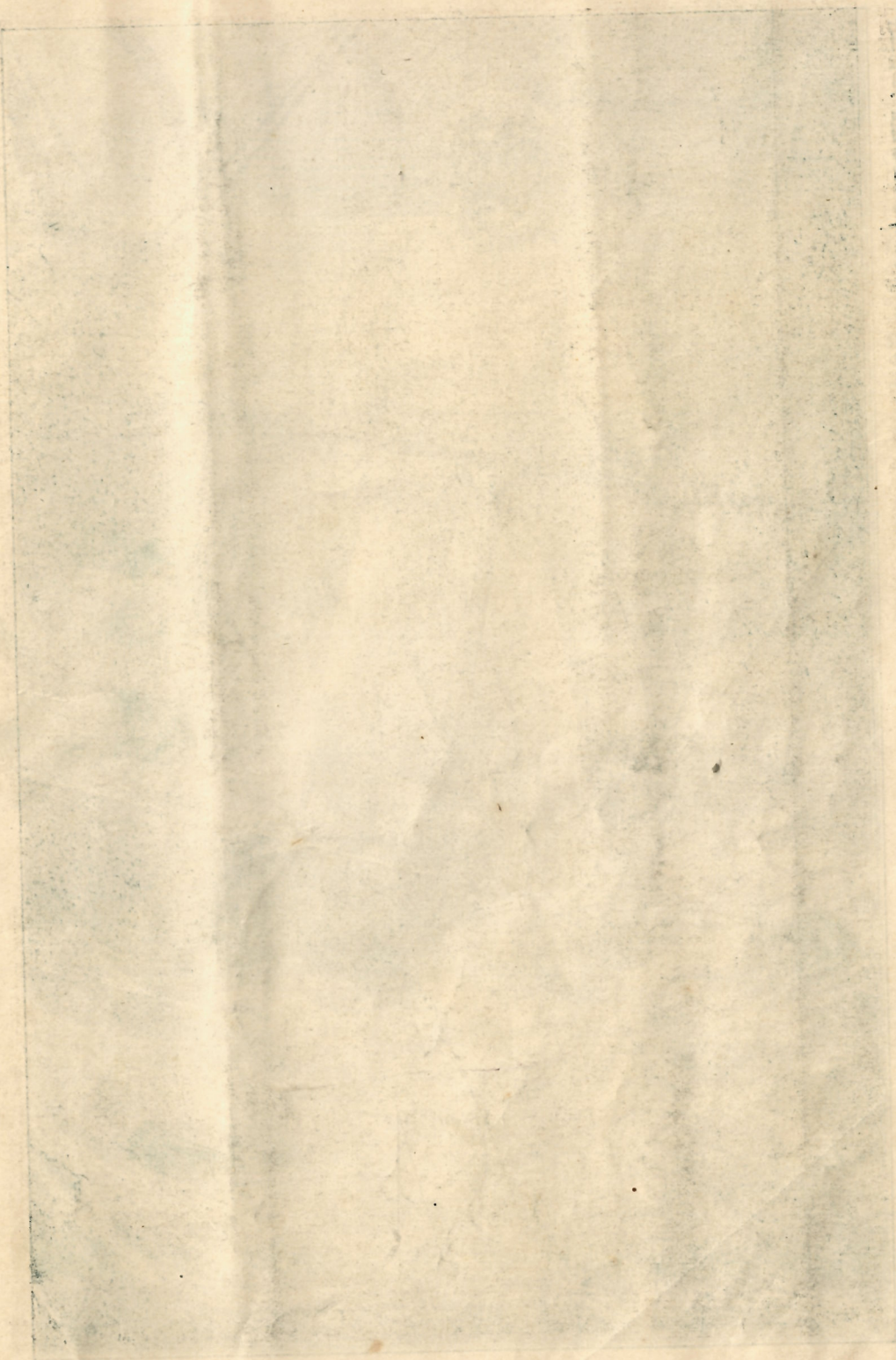
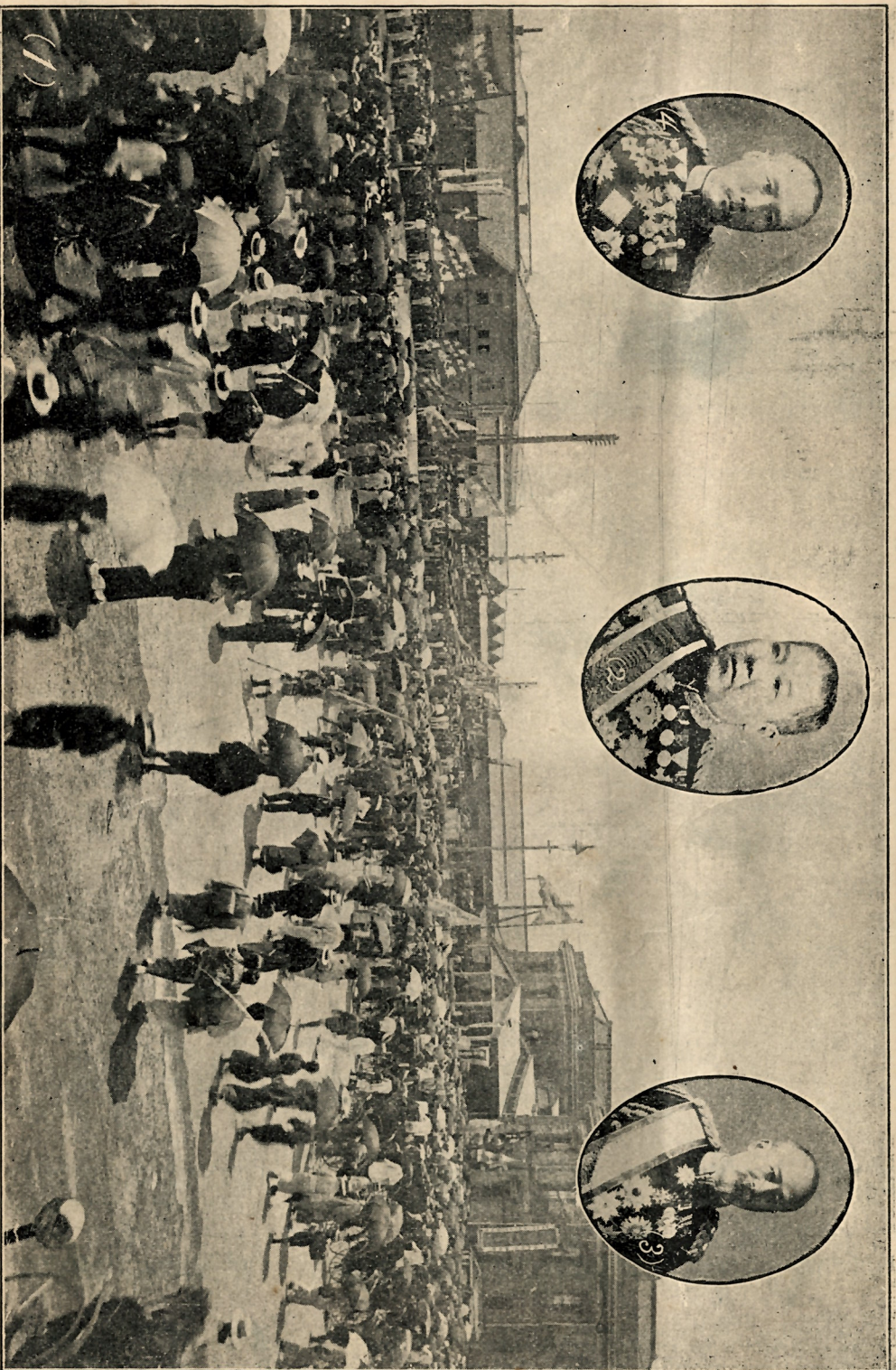
バルチック艦隊極東派遣のため日夜準備を急ぎつゝある光景にして、戰艦「クニアジ、ソーバロフ」に巨砲を据付け居る實況なり。（英國人の寫眞）

Making ready the Baltic Suqadron: Hoisting a big gun on board a battleship in the Neva.

艦長高橋守道氏は總員に退艦を命じ　自己は乘艇を

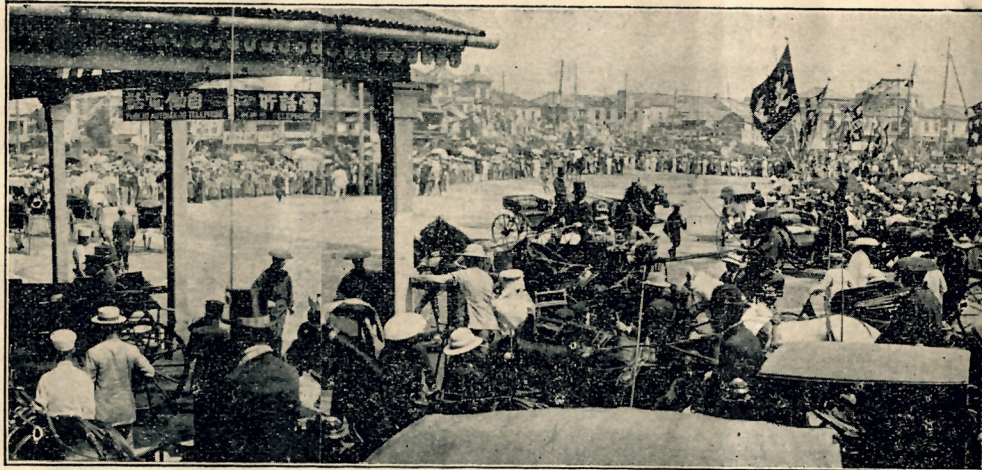
. While engaged on a certain special misson on July 5
dense fog, during which she struck one of the enemy's
was destroyed, though the greater part of the crew we
after having ordered the whole of the crew to leave the
nates to save himself, and remained on the bridge to th

艦と運命を共にす

七月五日、砲艦海門は特別任務を帶び作業中濃霧に會し、大連灣にて敵の機械水雷に觸れ破損沈沒の際、艦長高橋守道氏は總員に退艦を命じ自己は乘艇を固辭して最後まで艦橋に止まり、遂に軍艦と運命を共にしたり。

. While engaged on a certain special misson on July 5th. the gunboat "Kaimon" was beset by a dense fog, during which she struck one of the enemy's mechanical mines outside Dalny Bay, and was destroyed, though the greater part of the crew were saved, Commander Takahashi (Captain) after having ordered the whole of the crew to leave the ship, refused all the requests of his subordinates to save himself, and remained on the bridge to the last, sharing the fate of his ship.

總司令官の出發、新橋停車場前の壯觀

滿州軍總司令官大山元帥、同總參謀長兒玉大將其他幕僚の東京出發（七月六日）。（一）新橋停車場前見送人群集の光景、（２）大山元帥、（３）兒玉大將、（４）福島少將。

Marshal Marquis Oyama, Commander-in-chif of the Japanese Army in Manchuria, General Baron Kodama, chief Staff Officer of the same army, Major-General Fukushima and other Staff Officers left Shimbash Station, Tokyo, for the front. 1. Crowd a Shimbash Station. 2. Marshal Marquis Oyama. 3. General Baron Kodama. 4. Major-General Fukushima.

滿州軍總司令官大山元帥、總參謀長兒玉大將以下の東京出發（七月六日）。上圖、新橋停車場前見送人群集の壯觀。下圖、兒玉大將が停車場に到着、馬車を下りんとするとき、×の符が兒玉大將其人。

Departure of Marshal-Marquis Oyama, Commander-in-Chief of the Japanese Army in Manchuria, and other Staff Officers for the front. The upper picture is Shimbash Station. The lower is General Baron Kodama arriving at the Station, the × indicates General Kodama.

一騎打ちの勝負

得利寺激戦の序幕として龍王廟の激戦あり、これは小戦なれど所謂る一騎打の勝負なりしかば殊の外慘憺たる光景を呈しぬ。コサック兵は有名なる長鎗を揮つて戦ひ、我は白刃を以て之に當り、彼所此所に幾組かの格闘を演じ出し、さながら源平合戦の繪巻物にも似たる光景なりしといふ、我が戦死者二十七名の中の二十三名は突き創なりと言へば、敵は必ず胴切り、脊竹割り等の最期を取りしならん、此役に野村少尉勇戦して死せり。

Before the big battle of Teh-li-tz, a small fight took place between Japanese and Russian Cossacks, although the battle might not be large it was never-the-less desperate, and took place at the Ryuo Temple, as that of our celebrated "Gen-pie" war which took place several centuries ago.

退軍と進軍とにて奉天府の大混雜

モスコーを出發せし軍隊の列車旅順方面より後送されし負傷兵の列車と奉天にて落ち合ひ、一方は長き旅行を終りて戰地に着せし新鋭の意氣と、一方は負傷の苦痛に奄々たる氣息と兩々相對して一奇觀を呈す。

A memorable meeting and a contrast: The arrival of trains from Moscow and Port Arthur at Mukden station.

北韓の露兵暴虐

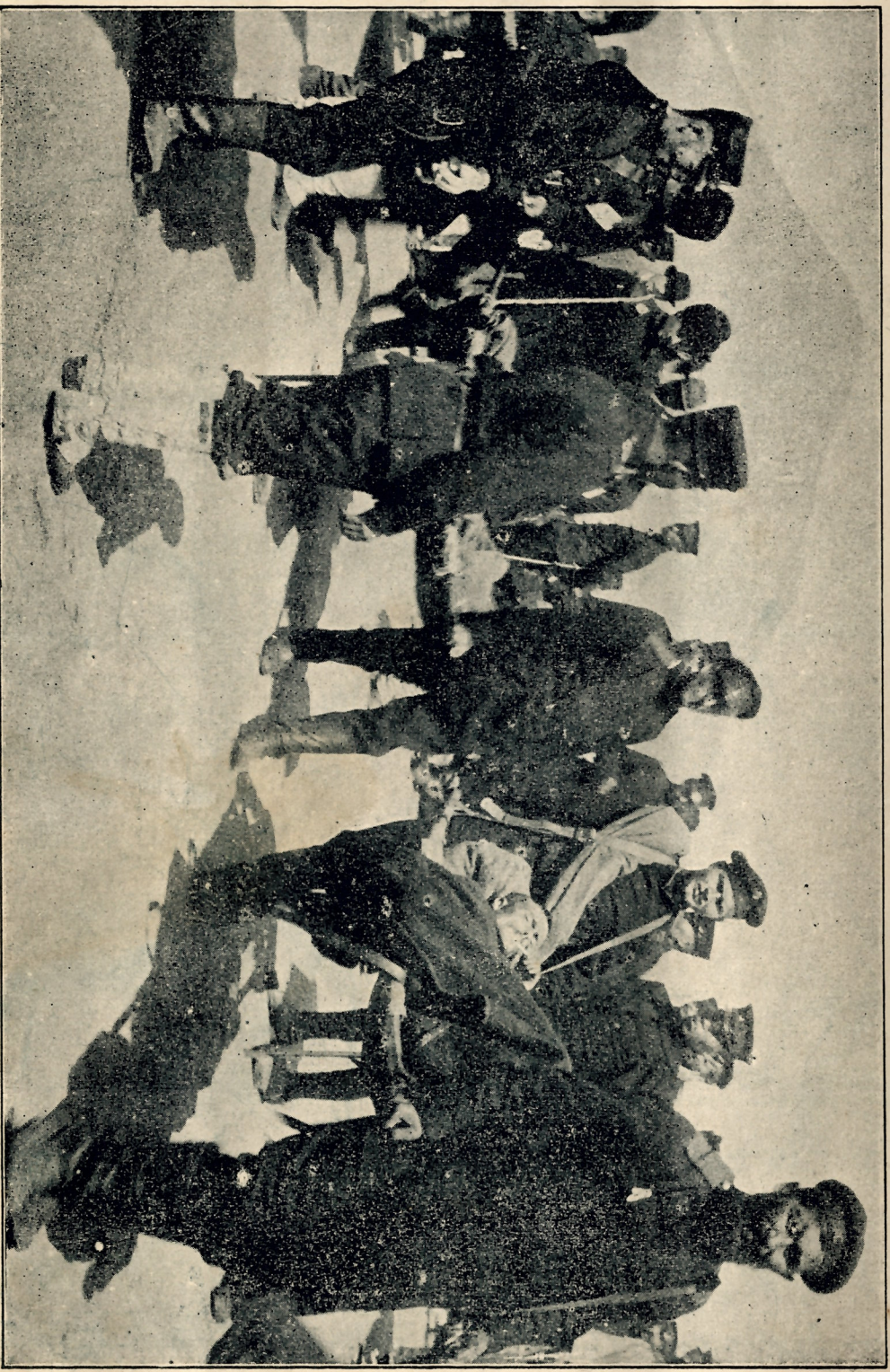
北韓に於ける露兵暴虐の光景。我官吏の調査復命の書に依りて描く。鬼の如き露兵は老若の婦人を辱め、これを慘殺する等あらゆる亂暴を働き、而して露京の外交官は日本兵人道を無視すなど列國に通牒しつゝあるなり。

This picture represents the barbarous cruelty of the Russian soldiers in North Korea.

露軍我が赤十字旗を砲擊す

得利寺の戰に於て赤十字旗を樹てたる我が臨時繃帶所に向つて露軍は亂暴にも砲擊を加へし爲め、遂に輕傷者は步行し、重傷者は擔荷にて更に後方に退却せざるを得ざる悲境に陷りたり。

The Russian soldiers attacked the Japanese Field Red Cross Hospital at the battle of Teh-li-Tz and the wounded Japanese soldiers had to be removed.

捕虜の捕虜運搬

伊豫の松山に於て健全なる捕虜をして負傷捕虜を運搬せしむる光景。

The Russian captives carrying their wounded friends at the Matsuyama Hospital.

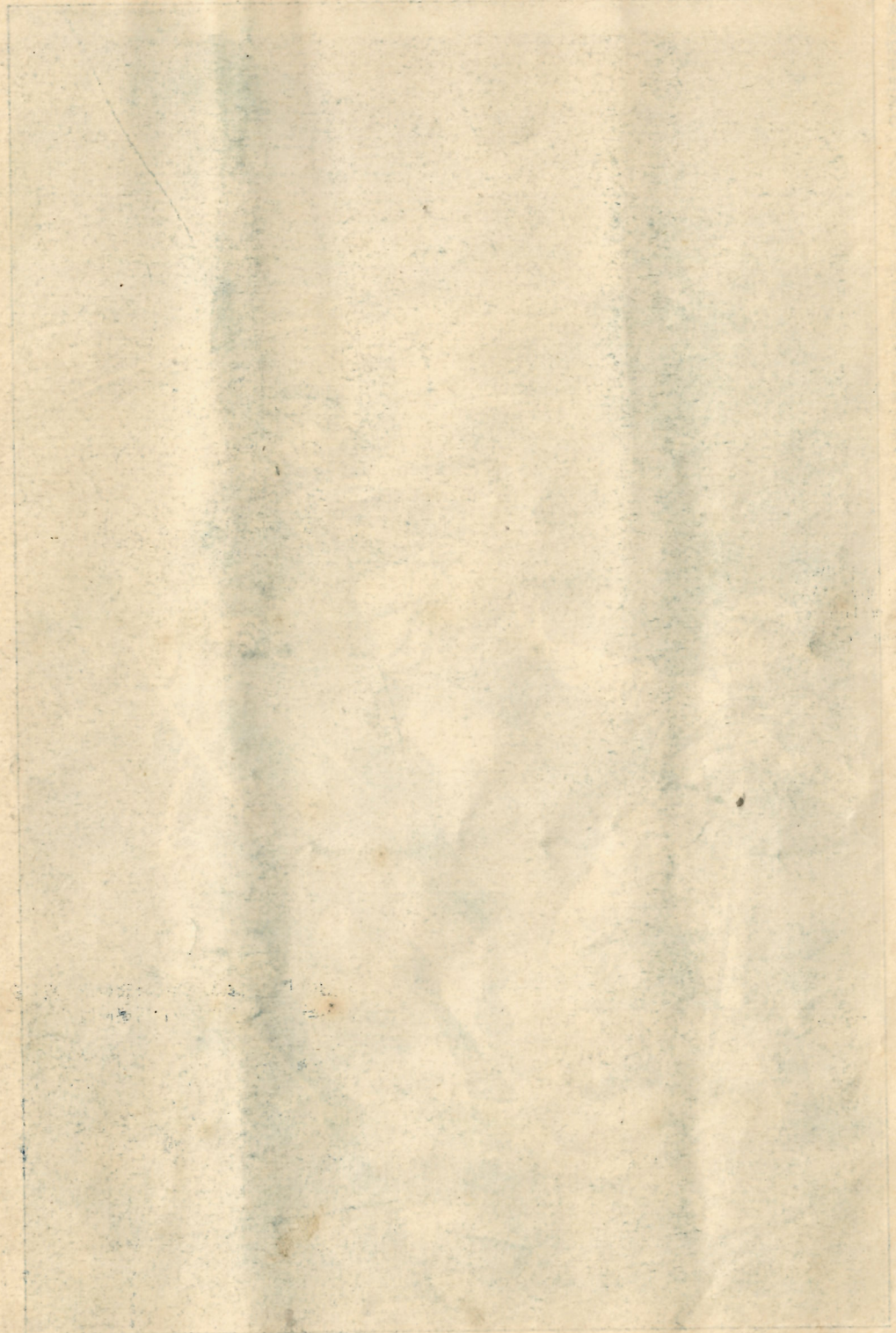
露の士官敗兵を斬る

得利寺の戰に於て露軍に勇敢なる青年士官あり、露兵畏縮して進む能はざるを見るや、軍刀を揮つて其二三を斬り以て士氣を鼓舞したれども、我が猛烈なる突擊に敵すべくもあらず、見る〳〵前後左右の味方算を亂して倒るゝや、彼は遂に割腹して自殺を遂げたりといふ。

At the Battle of Teh-li-Tz, a brave young Russian Officer commanded the retreating Russians to march forward, and killed a few of the soldiers who disobeyd his orders; but his efforts were in vain. The superiour force of the Japanese, and the fierce attack they made were against him, so he killed himself.

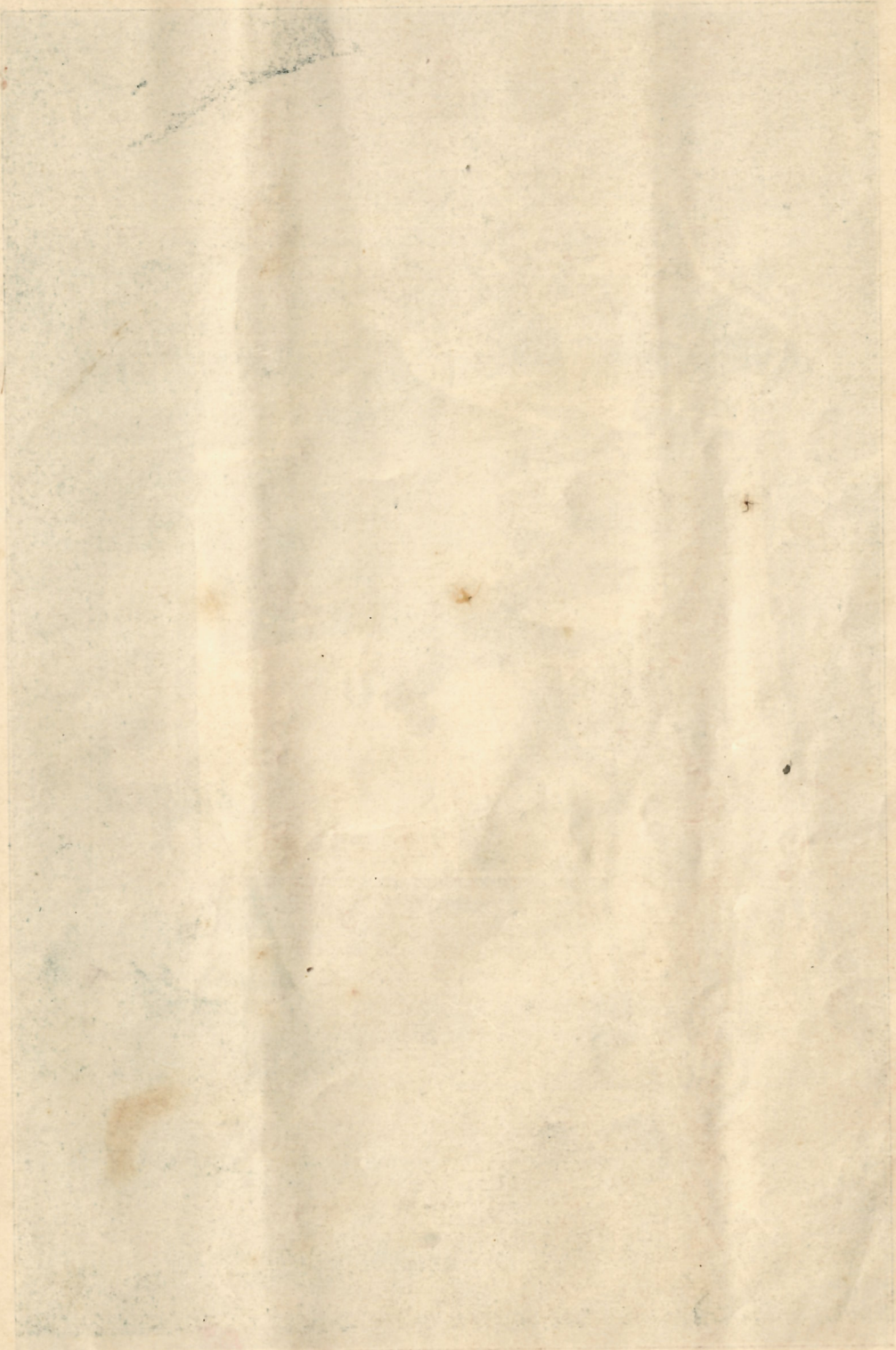
『私、米國人々々々』

米國新聞記者の一人が黒木軍と共に鳳凰城に滯陣の際、或夕暮陣外に散策し、夜に入りて歸る、途すがら突然我が哨兵に出遇ふ、夜分の事ゆえ從軍の腕章も哨兵の目に入らざりしことゝて、哨兵は必ず敵の斥候ならんと白刄を揮つて迫りぬ。記者先生大に驚き覺束なき日本語にて「私、米國人々々々」と絶叫せしかば初めて事情分明し、果は大笑で別れしといふ。

An American war correspondent belonging to the First Army, walked out of the camp one evening, and was challenged by a Japanese sentry, who thought the American might be a Russian spy. As each did not know the others language, a dispute arose, until the American was able to explain in his poor Japanese as: —"Watakushi America Jin." (*I am an American.*) Then all the trouble disolved they parted smiling.

支那人の頓智が我看護手を救ふ

瓦房店へ電信及び鐵道破懷のため某大隊の進發は夜間の强行軍なりしかば、歸路は疲勞のため落伍者多く、彼等は支那人の民家に休息中、敵の襲擊を受けたり、非戰員の宮津看護手も其一人なり、支那人は非常に心配し、遂に宮津氏の軍服を脫がしめ、頭髮を剃り落して辮髮を急製し、支那服を着せて之を敵中に伴ひ步き遂に無事歸隊せしめたりといふ。

Chinese sympathy.—A Sanitary private belonging to General Oku was nearly captured by the Russians. The Chinese who witnessed this very kindly dressed him in Chinese costume, putting on a pig-tail, and saw him safely to the Japanese head-quarters.

我が騎兵の苦闘

龍王廟の騎兵接戰に於て彼我の長鎗長劍相摩し相突く、すさまじき格鬪の中にも、犬竹一等卒は殊死して戰ひ、見る／＼敵の數騎を斬り棄てけるが、其身も數ヶ所の手傷を負ひて馬より落ち、刺されし鎗を拔くまもなく又もや一太刀切りつけられたり。此時敵は既に逃げ散りて人影なければ、いざ此上は潔よく自刄せんとて傍に斃れたる戰友の刀を取らんとするも、前後の痛手に流石氣丈の一等卒も體衰へて力及ばず苦悶せる中、かゝる所に我隊前進し來りて漸く救はれたり。

軍馬徵發

周防地方の軍馬徵發實景。

Buying up horses in the Suo district.

敗兵と組打ち

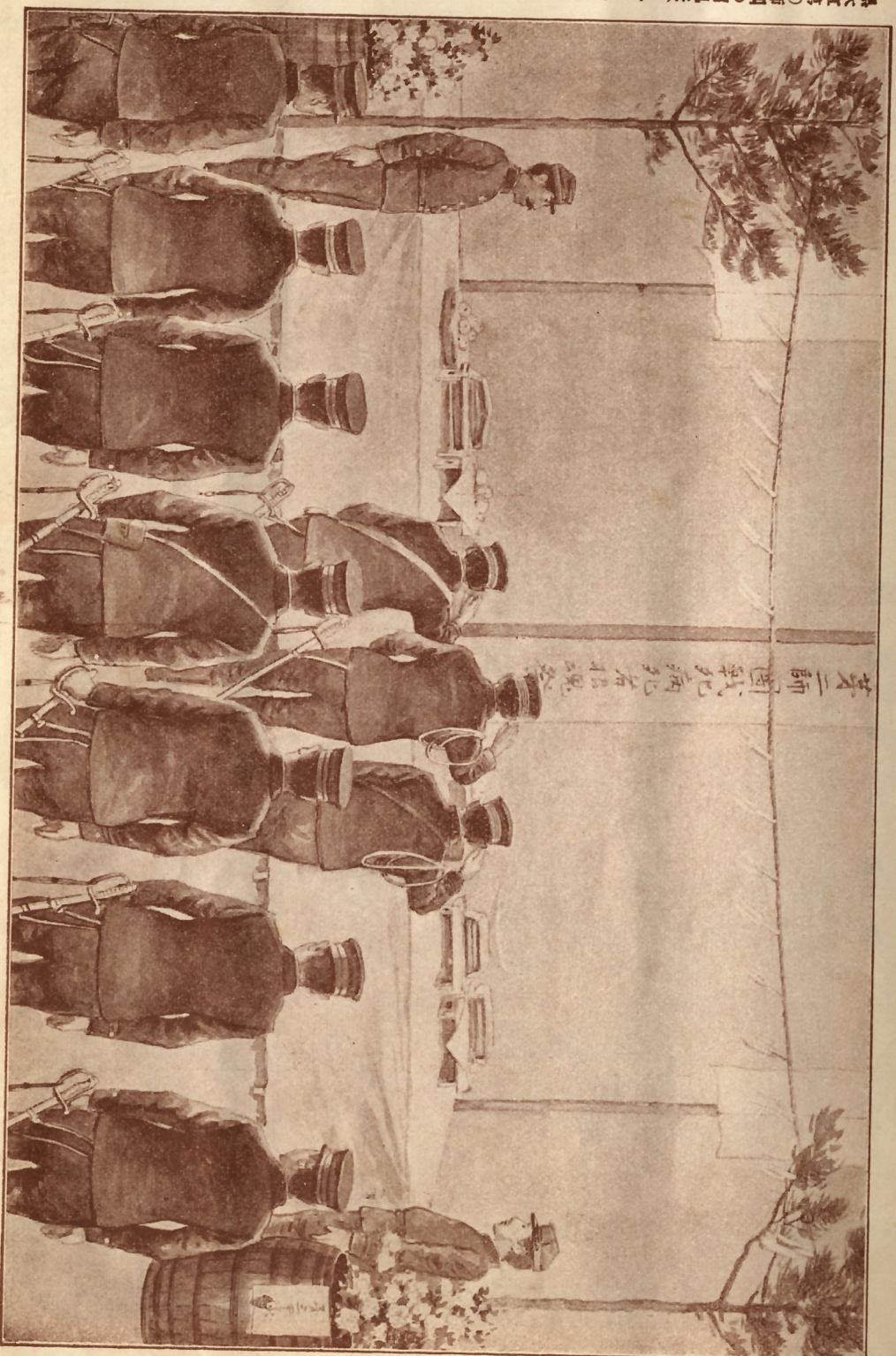
六月十五日得利寺大激戦後、我軍敵の潰走するを追撃する中、我が一兵卒は敵の一人に追ひ付き銃劔にて彼に一撃を加へたるに、彼は其銃を握つて離さず、彼是する中其附近に倒れ居りし敵の負傷兵、ムツクと起き上りて我兵に打つてかゝる、我兵咄嗟に銃を捨て無手にて敵の負傷兵に飛びつき其急所に突撃を試みしが、又もや他の負傷兵應援し來るに會ひ如何せんと躊躇する折柄、我兵の一部隊駈け來りて危難を免かれ得たりといふ。

Struggle between the Japanese and Russians at the Battle of Teh-li-Tz.

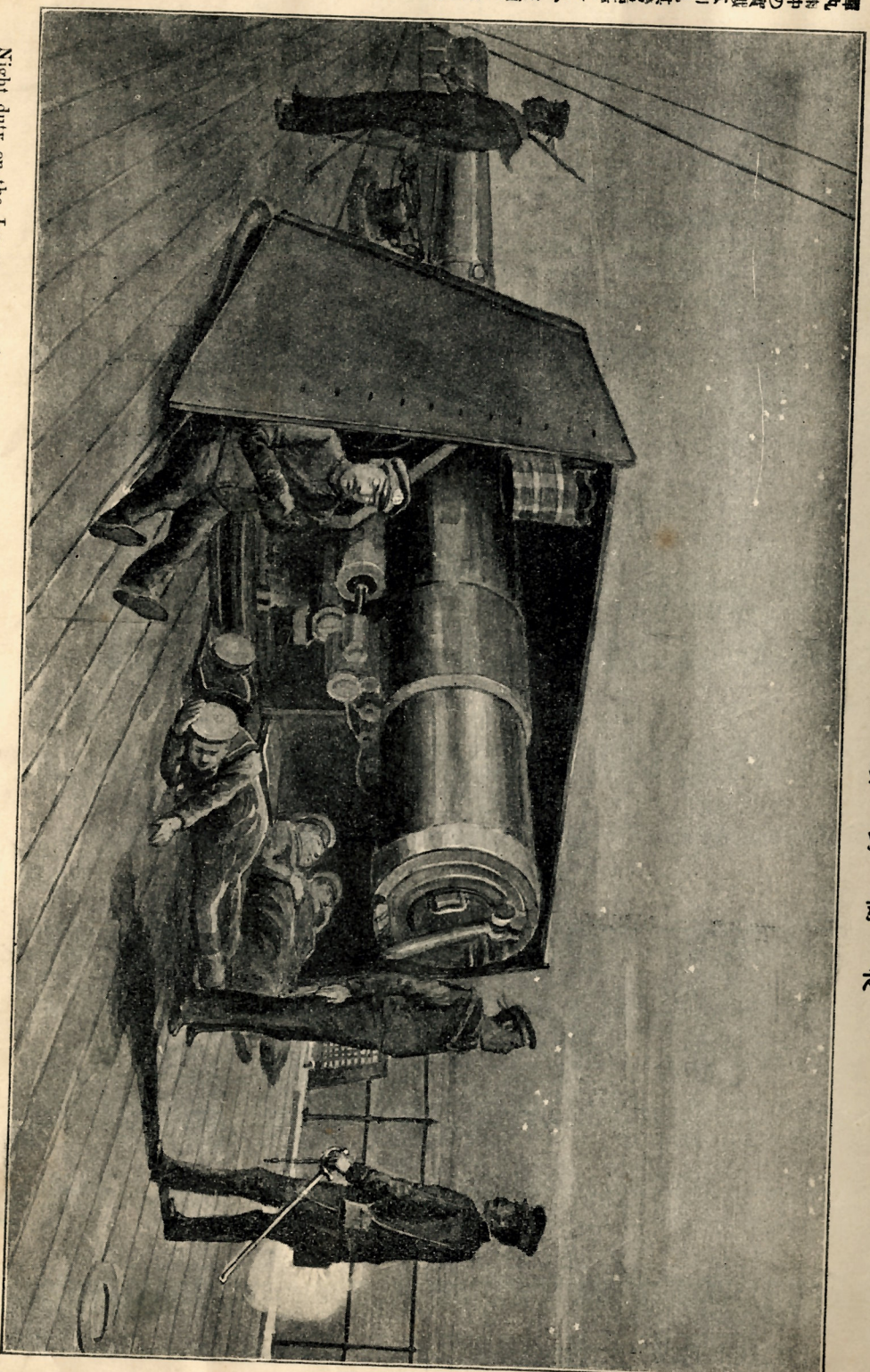
分捕銃にて輸卒の教練

黒木軍に於て分捕銃を輸卒に授け教練の光景（月村子實寫）。

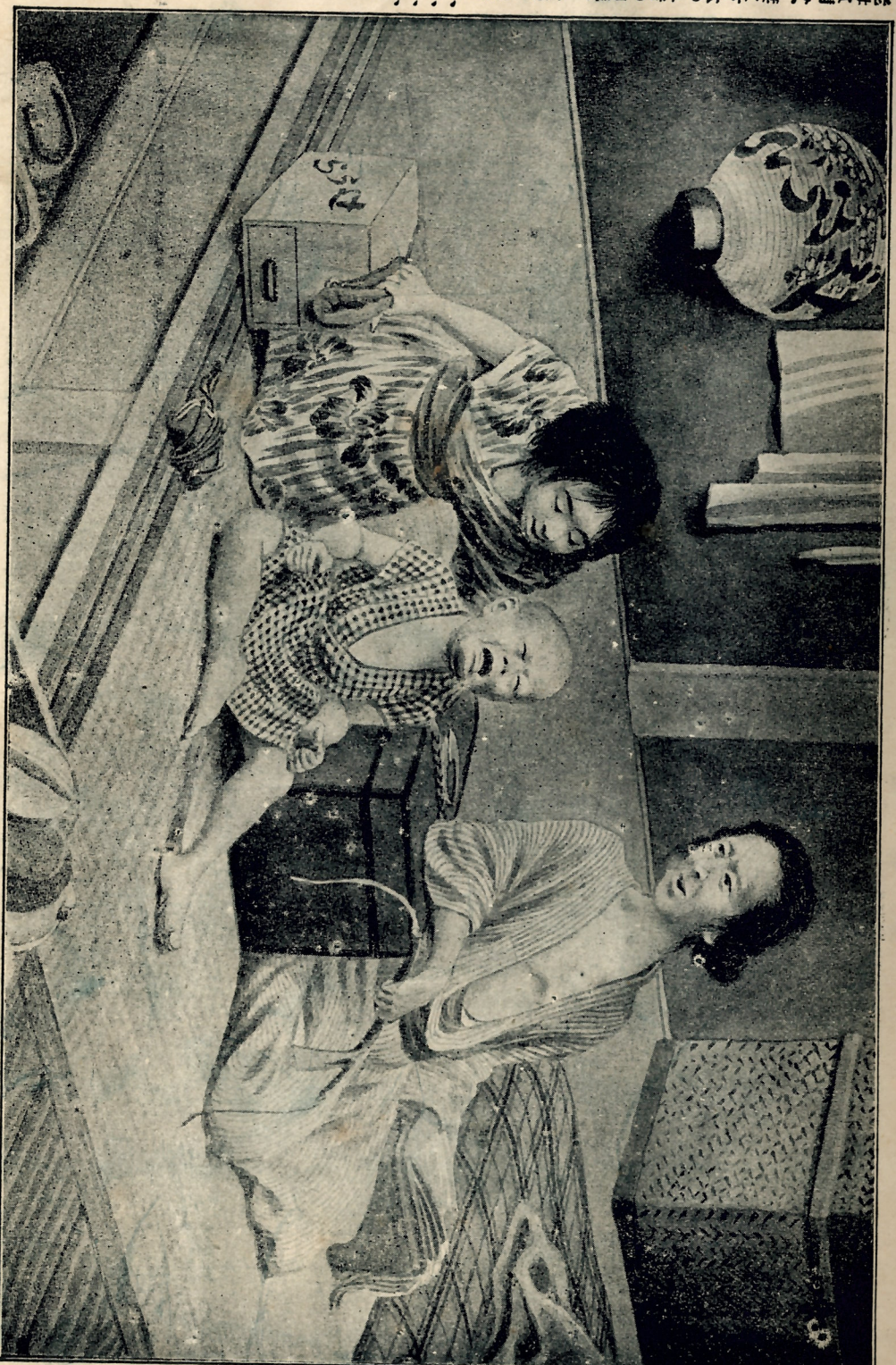
Musket training of the Japanese Supplies belonging to General Kuroki. (*By our Special Artist.*)

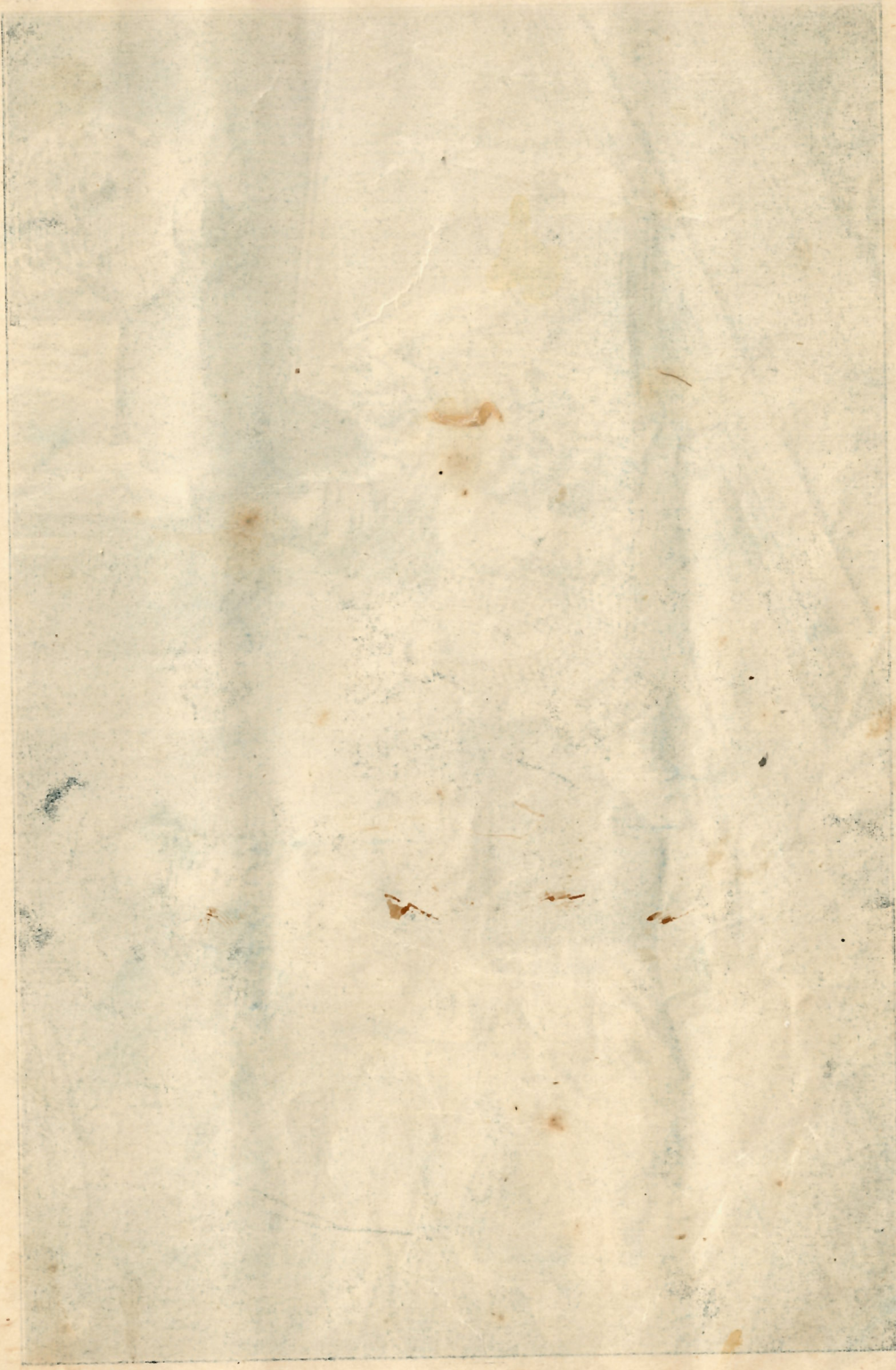
戰地の招魂祭

黒木軍第〇師團の招魂祭（月村子實寫）。

Memorial Service to the soldiers of the First Army who were killed in action. (*By our Special Artist.*)

夜間封鎖勤務の苦勞

彈丸雨中の實戰よりも其勞苦甚しく、旅順は此の如くして封鎖され居るなり。

Night duty on the Japanese man-of-war to seal Port Arthur.

出征者の小娘辻占を賣る

老母は病み、妻は下駄の鼻緒の内職、八歳の小娘はつじうら賣り、これ東京下谷區出征者の家族なり、出征者の姓は田中清二郎、妻はお柳、小娘の名はおしん、弟の清太郎は五歳なりと。

The Poor-quarter in Shitaya, Tokyo. The husband having been "Called out" to erve his country, the wife and daughter aged 8 are compelled to support themselves by the lowest lavouss.

世界第一の大馬

伯林の見世物にあり、耳より地まで一丈、背の長サ七尺、頭より尾まで一丈二尺、

The biggest horse in the world.

愛國婦人會々長及び評議員

右、愛國婦人會々長岩倉公爵夫人久子。左、同評議員侯爵世嗣伊達宗陳夫人孝子。

To the right is the portrait of Princess Iwakura, President of the Ladie's Patriotic Association. To the left Marchioness Date, Councillor of the same.

戰時畫報 第十六號

海陸公報

摩天嶺一帶の占領

戰地特派員發電七月三日午後十一時五十分鳳凰城軍用局經由

去る二十七日○○部隊は少數の敵を六道溝附近に擊退し正午迄に四道溝より草下嶺に亘る間を占領し賽馬集に在りし敵の步騎兵約五千の內主力は本溪湖方向に一部は四方拉子方向に退却せり

○○部隊の一部は二十七日遼陽街道上の分水嶺を占領し次で我が將校斥候は連山關へ進入せしが敵は旣に糧秣を燒きて退却せり二十九日前衞隊は分水嶺連山關へ進み一部は一日を以つて摩天嶺を占領せり

目下○○隊は摩天嶺、小摩天嶺、新開嶺の線を略取す前面の敵兵二千は甜水店西方へ退却せり又○○部隊の一部は二十九日敵の抵抗なくして北分水嶺を占領したり此の敵は本溪湖西方の三家子よりケウトウ方向に退却したり

某隊の四門子へ進みたる部隊は東萬龍河及び萬龍河にて敵を攻擊し我が死傷二十四、敵の死傷七十餘、捕虜將校三、下士卒十六

二十九日利保嶺の敵を攻擊し我が戰死兵四、負傷將校一、卒二十二、敵の死十、捕虜八、敵は甜水店に退却したり

摩天嶺逆襲詳報

七月五日午前大本營着

四日拂曉に於ける摩天嶺附近前哨戰に關する詳報摘要

午前四時頃敵兵二、三名摩天嶺西北約二吉米の我小哨前に現出し次で約一中隊の敵兵同小哨を急襲す小哨長吉田少尉は直に之を其後方に報ずると同時に漸次退却して其本隊に合せんとするや他の約一中隊の敵は北方山地より現出して我を包圍す吉田少尉は部下の大部を南方山地に差遣し自ら五六の兵卒と共に止まり格鬪し敵を斬ると十數名遂に血路を開きて退却せり前哨部隊は銃聲を聞き直に陣地に就かんとせしも敵の一部は旣に我が陣地中に進入しあり玆に於て彼我悲慘なる格鬪戰を爲せり此際該前哨部隊の一部は南方山地より側擊したる爲め敵兵退却の色あり恰も好し前哨主力の一部も之に增加し遂に敵を擊退せり玆に於て馬場大佐は其部下を率ゐて追擊し金家堡子(摩天嶺の西麓約一里半)附近に至りて塔灣西方の敵と相對せり小高嶺西方に在りし我前哨部隊前にも摩天嶺方面より少しく後れて敵兵來襲せしが忽ち擊退せり敵の兵力は約二大隊なりき而して此戰鬪は殆ど接

戰にして我死傷者の多くは數ヶ所の劍傷を負へり

我戰死特務曹長吉塲仲次以下十八名負傷中尉河野治一(重傷)少尉小林郁四郎(輕傷)以下三十六名なり敵の隊號は摩天嶺に向ひしものは歩兵第十、第二十四聯隊新開嶺に向ひしものは歩兵第二十二聯隊にして樣子嶺方向に退却し其少數のものは塔灣及其西方高地附近に停止せり敵の死體にして我軍の埋葬せるもの五十三名負傷者約四十追擊の爲生じたる敵の死傷は未詳なるも尚多數ある見込なり

蓋平占領戰報

第二軍は昨九日蓋平附近の敵を擊退して正午頃全く同地を占領せり其經過左の如し

其一　七月六日午後大本營着電　奥大將報告

本日午前九時前後に於て軍の一部は四方臺東北方約一里の山頸及び四方臺北方約一里の山頸を守備せし敵の歩兵約千六百名を驅逐して該山顛の線に止まれり該地に在りし敵は北方に敗走せり軍の主力は其進路上に在りし敵騎を驅逐しつゝ前進し金家勾より小藍旗を經て二道河の線に達し右翼の一部は崔家屯の高地を占領せり

我損傷は岩崎少佐(初太郎)重傷下士以下即死二、負傷十にして敵は死體約二十を遺棄しあり

軍の右翼方面に破れし敵は蓋平附近に退却せり

其二　七月七日午後大本營着電

軍は本日砂崗臺附近に在りし敵を驅逐して正午頃塔子溝より大望海寨東方の高地に亘る線に達せり敵の歩、騎、砲の若干は我軍の進路上に在る隘路に於て逐次に抵抗を試みつゝ北方に退却せり

土人の言に依れば蓋平附近に約二萬、海山塞に約二千、同地附近に約一萬の敵あ

○廣島所見(一)

廣島豫備病院第一分院面會室の光景、負傷者の一人を五六の家族が取巻きて涙と共に語り或は高笑ひを以て話す、其狀恰も狂人の感あり

(六月廿一日…蘆原特派員實寫)

りて蓋平北方高地及び西臺附近の高地には砲兵を備へ又た大石橋附近には依然敵兵駐屯し漸次增加の摸樣ありと

七月五日以來の死傷者左の如し

歩兵少佐岩崎初太郎(前掲)重傷少尉森田貞助輕傷、下士以下戰死四、重傷十一、輕傷七、合計二十四人

其三　七月八日午後大本營着電

敵は海山塞附近より蓋平附近に亘る間及び西臺北方高地附近を占領し午後一時頃よりは鐵道列車を以て海山塞附近に軍隊を下車せしめつゝあり

湯地南方約二里の花紅溝附近にも敵兵あるものゝ如し軍は豫定の計畫に依り此敵を攻擊せんとす

其四　七月九日午前大本營着電

軍は本日午前五時二十分より蓋平附近に在る敵に向て砲擊を開始し午前八時頃大平屯高地、蔡家屯高地、東双頂山に在りし敵を驅逐して該地を占領せり敵は石門及び海山塞附近に砲列を布き尚ほ頑强なる抵抗を續けつゝあり

其五　同日午後大本營着電

蓋平附近の敵は昨夜來著しく其兵力を減じ蓋平附近の陣地を我軍の爲め奪取せられたる後石門、海山塞、高家屯附近の險惡に據りて再度の抵抗を爲したるも正午頃我軍は更に此敵を攻擊して同高地の線を占領せり

敵の砲兵は其後紅旗廠、腰嶺子、石佛寺の高地に在りて我追擊隊を砲擊せしが午後三時に至り砲聲殆と沈默せり

此戰鬪に於て小泉少將は大腿に銃創を受けたり他は取調中

○廣島所見(二)　(六月廿一日…蘆原特派員實寫)

米國篤志看護婦マッギー女史一行の廣島豫備病院に於て傷病兵に對する働きは見るも氣の毒なる程にて實に懇切を極めり此圖は一行中のクラッドウキン及びキングの二孃が病兵に淸拭を行ふ所なり

水雷艇隊の奇功　旅順敵艦の轟沈

七月二日午後七時大本營着電東鄉聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

第十二水雷艇隊（司令海軍少佐山田亨）は六月二十七日夜旅順港外にある敵の哨艦に對し攻撃を行ひたり其報告に依れば同夜我艇隊は旅順口港外に進航せしに敵の窺知する所と爲り探海燈の熾なる照射と砲臺軍艦の猛烈なる射撃を冒して黃金山下にある二檣三煙突の敵哨艦（戰鬪艦又は一等巡洋艦ならん）を襲撃せしに該艦は水柱を揚げて轟沈せり此時敵の驅逐艦は我を攻撃し來りしを以て之と砲火を交へたりしが其内一隻は艦腹を現はし白煙を揚げながら轉覆沈沒せり之れ各艇が齊しく敵の探海燈光下に明認する所なりと云ふ

此の攻撃中戰死海軍大尉權藤薰義以下十三名負傷海軍中尉矢野祐太郎以下二名なり

旅順口外の襲撃　水雷艇隊の奮戰

七月十日午前大本營着電東鄉聯合艦隊司令長官報告

第六艇隊（司令海軍少佐內田良隆）は八日の夜旅順口港口に在る敵の哨艦を襲撃する爲め雨霧を冐して港口に近づき索敵せしも天明に至るまで敵を發見せず然るに翌九日午前五時三十分に至りて第五十八號艇（艇長心得海軍中尉中牟田武正）は黃金山下濛氣の內に敵艦アスコリドの碇泊するを認めたるを以て之を襲撃せしが其効果は未だ明かならず同水雷艇隊は敵の要塞より猛烈なる砲撃を受け第五十八號艇第五十九號艇にて各下士一名重傷を負へり

軍艦海門の遭難

七月七日午後大本營着電東鄉聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

軍艦海門は七月五日特別任務を帶び作業中濃霧に會し大連灣外に於て敵の機械水雷に觸れ破損沈沒せり艦員の大部分は救助收容せられたれども艦長高橋守道、主計長塚原喜八、掌砲長松下善之丞外下士卒十九名は生死不明なり艦長は總員に退去を命じたる後部下の勸告せしにも拘らず退艦乘艇を固辭し最終まで艦橋に止まり遂に本艦と其運命を共にせしが如し

上村艦隊の追躡

七月五日午前大本營着電上村第二艦隊司令長官報告の要領左の如し

七月一日午後六時四十分敵艦「ロシヤ」、「グロンボイ」「リューリック」の三隻對馬東水道を南下し海峽を通過せんとす我艦隊は對馬壹岐の間に於て其前路を扼し之に迫りしに敵は我艦隊を認むるや急に舵を轉じて北々東に逸走せり此時彼我の距離約十二海里我艦隊は全速力を以て之を追躡せしも時漸く薄暮に近く將に敵の形跡を失はんとす我水雷艇隊の一部は益々進で二三海里に迫りしとき敵は探海燈を照し猛射防戰に努む我艦隊は益々之に迫りしも砲戰距離に達するに至らずして午後八時五十分敵は忽然燈火を滅して暗中に沒せり我艦隊は百方之れを搜索せしも遂に之れを發見するを得ず我艇隊も亦水雷發射距離に達するに至らずして敵を逸せり

露艦再び出づ

七月十一日午前大本營着電東鄉聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

九日午前七時頃より敵艦バヤーン、ヂア

ナ、パルラーダ、ポルターワ、ノーウヰック砲艦二隻驅逐艦七隻は數多の掃海船艇を先頭として漸次に港外に出で同日午後鮮生角より龍王塘附近まで來れり我驅逐隊の一部は敵の掃海を妨害するの目的を以て屢々之と砲戰し第三艦隊の一部は小平島附近に在て之と對應し午後二時頃に至り敵艦バヤーンと多少の砲火を交換せしが午後四時頃に至り敵は漸次に港內に退却せり我艦艇には驅逐艦朝潮に於て給仕一名輕傷したる外一の損害なし

敵千三百騎來襲

七月九日午後大本營着電　黑木大將報告

五日午後チ、ンスキー第一聯隊の千三百騎は北分水嶺附近に在りし我一支隊の前面に來襲せしも擊退せられて北方に退却せり

我戰死下士以下四負傷卒三なり

○廣島所見（三）

某輜重大隊の一部隊廣島に來り翌未明を以て宇品港を發せんとす、其前夜一兵卒の三等症に罹り進退自由ならずして將に歸國の途に就かんとするものありしが、隊中の兵士等代る〳〵其症者を罵倒せりとぞ

（於廣島…蘆原特派員寫生）

城廠を占領す

七月九日午後大本營着電　黑木大將報告

我一支隊は去る六日夜敵騎約三百を驅逐して城廠を占領せり我に死傷なし敵は北方に退却せり

雜錄

伏見宮の御仁德

（高畑上等兵の談）

私、家は牛込築土八幡町で、親讓りの理髮渡世家には妻と當歲の一男とがあるばかり、外に是れと云ふ係累もない至極の身輕者で御座ります其れゆゑ廣島出發の際には、自ら進んで決死隊とも云ふべきものに擇ばれました位で、三分五厘浮世床の數ならぬ身の私も、今度こそ一番命を捨てゝ見やうと、金州南山の激戰には、眞先驅けての働き、功名と申す程のことはなくとも先づ他人一倍の任務だけは仕遂げた積りで御座ります

金州南山の戰況、此れは御承知のことで御座りますから略しませうが、其の最後の突貫と云ふ時、私は矢張先鋒で同じ決死隊と共に山頂目懸けて肉薄して行きましたが、敵丸は實に雨霰のやう、面も向けられぬ程で、私は都合六發の敵丸を身に受けました、其中の五發迄は運よくも唯だ右の拇指に負傷したばかり、孰れも無難でありましたが、最後の一發では正しく右の眼球をやられました、併し氣が立つてゐて夢中なので、何の頓着もなく驅足を續けて、敵に出逢へば手當り次第に斬るやら突くやら、敵を屠るのを丸で商賣用の剃刀で、客の頰ツペタのニキビを潰ぶした程にも思はず所謂めくら滅法界に踏み込み〳〵戰ひましたが、後から來た戰友が『ヤ、高畑遣られとるぞ』と叫ぶのを聞いて氣が附いて見ると全身赤けに染まつて眼窩の創から噴水のやうに血が噴き立つて、氣は確かなつもりであつたが遂に其の場に倒れて了ひ盛んに多勢の者に踏み付けられましたが、いつの間にやら野戰病院に收容せられまして、正氣に回復した時は病室の寢臺の上に橫はつて、過ぎ去つたことは丸で夢のやうな心地が致しました

野戰病院では、私は重傷者といふので手厚い看護を受けました、兩眼は繃帶で蔽はれて全く日光を見られずに居ますと、或日のこと、私共の病室へ見舞に來られた將校があります、私の床の側に立ち手を握られまして『高畑、高畑、名譽の負傷だぞ氣を確かに持てい』と慰めて下さるのであつたが、私は眼は見えず、心の中で橫柄なことをいふ人だと思つて居りますと、又た『何か欲しい物があるか』と聞かれました、喉が乾いてゐる時でありましたので、私は『水を頂きたい』と云ひますと、其の將校が『軍醫水を』と命ぜられました、軍醫殿は『ハッ』と答へて近寄つて參られる氣合でありましたが、其の將校は手づから水を飲ませて下された、私は先きの程から其の將校の音調と云ひ、一室内の人々の靴音と云ひ、何となく氣高いやうな、恐縮を極めてゐるやうな樣子に感じられてならぬので『何方でいらつしやいますか』と尋ねますると『己れは師團長だ』との御答であつた、師團長、師團長とは伏見宮殿下です、私は其の御言葉を伺ふと共に嬉しく忝なく、畏多く、全身電氣にでも打たれた樣な心地が致しまして、思はずも其の時迄、私の手を握つて居られました宮殿下の御手を固く握りしめましたが、ハッと思つて起上らうと致しますと、兩眼に溢るゝ涙は傷所の痛みを起して起きることは叶ひませんでした、殿下は直ちに軍醫殿に命じて手當をして下されました、暫らくすると殿下は更らに『高畑、何か欲しいと思ふ物があるなら言へ』と仰せられたので、私は冥加に甘へて、久しく頂きませんから煙草をと御願申しますと、『此處にはないが直に取らせてやる其れまでは此れで辛捧しろ』と仰せられて、御喫料の貴き御煙草八本まで賜り、其の中の一本を勿體なくも御手づから火をつけて私の口まで下されました、其時私は斯かる仁慈の御君を師團長と仰ぎ奉り其の御馬前に光榮ある負傷をしたことの、此の上なき果報目出度いことであると心から感じまして、二十七年來始めて我身の尊いことを思ひました、私は

○廣島所見（四）

明日をも知れぬ兵士が銃劍を磨いた後で、一竿を携へ、太田川に釣を試む、英雄閑日月ありとでも云はんか、陣中の風流なか〳〵に面白し　（於廣島…蘆原特派員寫生）

今後一刻も早く平癒して、再び戰場に馳せ向ひ、殿下御馬前の塵となつて、冥加至極の御恩德に報ひ奉る決心で御座ります

軍人の眞情

遼東半島軍の某將校より大本營幕僚へ左の書信あり、以て軍人の眞情を看るべし、此の發信者の前回の書翰は忝くも天皇陛下の御覽に供せられしと聞く

兩陛下及皇太子殿下より葡萄酒卷煙草等伏見宮殿下へ御下賜相成候處殿下には悉くこれを部下の將卒に御分配相成其御示しに一杯の酒數本の煙草にても可なり必らず悉くの者へ行き渡らしめよとの事にて殿下への御見舞品は遂に團下一同の者が拜領する事に相成申候　將卒一同は感涙を濺ぎ中には斯る名譽を辱うするも殿下の師團下にあればこそとて煙草を背嚢に仕舞保存致候兵卒も有之歩兵○聯隊の○大尉が

彈丸の下笑ふて進む丈夫も
君が惠みに涙こぼるゝ

と詠み出るを初め將卒中感激の餘吟等不少候得共皆右の意味に外ならず候間他は略し申候小生は右に對して

みめぐみにこぼす涙はやがてまた
笑み行く彈丸の雨となるらむ

と返へし申候チト理窟らしく相成候て恐縮に不堪候得共御惠みの露に一醉したる即席の口吟に御咎め無之樣願度候

却說南山の戰鬪に就ては幾多忠勇の美談有之候得共已に夫々書認め其筋へさし出し候間茲には不申上候否なアマリ澤山にて到底一片の書狀に盡し得る處に無之候唯小生は我兵皆君國の爲に喜で斃れ一人として卑怯者無しと斷言して憚ず候當時の戰鬪は實際屍を踏越て突擊し公報にも有之候通り全く意氣衝天の勢を以てし候　も機關砲の彈雨は忽ちにして屛風を倒すが如く我兵を亡ひ候を如何に斃れても屈せざる處實に勇氣と器械力の爭ひに有之候

去乍旭旗翻り萬歲を唱へたる後彼我の屍纍纍たるを見候ては一片同情の涙を禁ずる能はず候彼我に論なく當人は君國の爲笑て斃れ候得共彼等は親兄弟あるべく妻子あるべく其心根を酌み候ては今迄張り詰し力も萎み申候

滯陣中新聞の到着を樂しみ候者が記事中の留守宅訪問記を讀で泣かざる者無之或者は曰く稀れに來る新聞ゆゑ隅々迄も讀み盡せども留守宅訪問記丈けは讀み得ずと涙を吞で語り候を以て御推察被下度候

二十七八年役後殊に又三十三年事變後小生が遺族扶助料問題に微力を盡し候は一は遺族の悲境を見るに忍びざるに出たるも一は今日あるを豫想したる爲めに有之候貴兄も從來此問題には御同感の事ゆゑ此際一層軍人遺族救助御配慮の程改めて御願申上候

爾後の情況可申上之處トンダ泣言に陷り恐縮の至りに御坐候　殿下を初め一同益す勇奮罷在候間御安意被下度候

匆々不盡

六月廿六日　○○軍司令　某

大本營　某殿

輸卒嘆

輜重輸卒が軍人ならば蝶々蜻蛉も鳥のうち

輜重輸卒が人間ならば電信柱に花が咲く

牛馬と伍して此俗謠を唱ひ、其職に斃れて而る後國に殉するの光榮を想ふ眞に同情を値するものは彼等輸卒の身の上ならずや、洒落にあらず、醉狂にあらず、請ふ彼れが心の聲に聽けア、是れも御國の爲で御座います、私は香川縣木田郡木太村の百姓、私の父は今年七十一歲の高齡、母は五十九歲、而かも父は年のせいで早や眼の見えぬ片輪同樣、母は二三年も前から淺ましい精神病に罹つて年と共につのるばかり、兄弟は一人欠て外に五人も御座いましたが、何の因果か揃ひも揃つて箸にも棒にもかからぬヤクザ者、家出をするやら、破落漢の仲間にはいるやら總掛りで親泣せをするばかり、其樣な次第故貧乏も一通りではなかつた事を御察し下さい、今度の動員令で愈々赤紙が廻りました際も家中殆んど途方に暮れたやうな譯、先づ村役場から貰つた七十錢の旅費を割いて五合の酒を買ひ心ばかりの別れの盃を取交はせました、其外にまた十五錢といふものは跡に殘るもの、明日の食料に置いて行かねばならず、殘りの三十錢を懷にして村を立ちましたが汽車賃十八錢をとられて手に剩すは僅か十二錢、所が泣面に蜂とは此事でしやう其うちの十錢をば何處へ何うしたか失くして了い、倒さに振つても二錢銅貨一つきりになりました、夕飯が喰ひたくも二錢では喰はして呉れませぬ、やつと或る農家へ入つて拜むやう

○負傷兵の談

日露の接戰に際し我兵の進擊するや、ワーと大聲するにあらずして常に萬歲〳〵と連呼しつゝ突進するを例とす、之を以て勇氣百倍する程なりと

（小杉特派員寫生）

にして一椀の飯に有り付きました

漸く兵營に入つて三度の食事は不自由なく食べられるやうになりましたが、さて忘れやうとしても忘られないのは家に殘した兩親の身の上、素より半文の貯へもあらう筈がない、瘠腕ながら稼ぎ人の私しは取り上げられて了う明日からは干乾しになるより外はありませぬ、あゝ思ふまい〳〵御國の爲めに戰さに行くものが今更其樣な女々しい泣言を繰り返へしても何うなるものかと、思ひ切らうとすればするほど猶思ひ出される辛らさ情けなさ、外の步兵や騎兵などが今に遼東に押し渡つて露助の首を珠頭續ぎにして呉れやうの旅順が何うの奉天が何うのと肱を張つて怒鳴つて居るのを聽くと、ア、責て自分もあゝいふ兵種に編入されたら少しは人らしい手柄を立てる望みもあり、氣に張りも出て威勢もつき何のこんなつまらぬ事に胸をいためる筈もないが、悲しい事には輜重輸卒、牛馬並と言たいが何うして牛馬まで行けば立派なもの此前

入營した時、ある士官が輜重兵に言ひ聽かして居つたのを聽けば輸卒よりは馬匹が大切ぢや、輸卒は幾何でも代りがあるが馬はさうたやすくは行かぬ、一頭幾何で大枚の金を投じても日本國中では中々思ふやうには集まらぬ輸卒よりは馬匹の方が遙か貴重ぢやと四方憚らず怒鳴つて居る、ヱ、馬鹿〳〵しい、同じ人間に生れながら馬より下に取扱はれて何の生きてる甲斐があらう、とそれを聽いた時の忌々しさ、同じ御國の軍人を何の遺恨で夫れほど輕蔑するのだと胸も張り裂けるやうでしたが、イヤ自分には兩親もあり、兄弟もある、此處で一身を過つては自分は兎に角數多の人に泣きを見せねばならぬ、此處が我慢の爲どころと僅かに堪えたこともありました

要もないことを考へ出しては、嘘でも飾りでもありませぬ、殆ど喰ふものも咽喉を通らぬ始末で御座いました、所がこんな腑甲斐ない人間でも親となれば可愛いものと見えて、身體も惡く氣も確かでない母は郷里から汽車にも乘らず食はず飮まずで兵營へ訪ねて來て呉れました、家に居つたとて元より養ひになるほどの物の口に入らうわけもありませぬ、まして女にしては健康の身體でも堪らぬほどの遠路を絕食で繼けて來たのですから疲せ衰へて見る影もありませぬ私は幸ひ給料の蓄つたのが六十錢程あつたから十錢だけ手元に殘してアトを母に持たせてやりました、あれで幾日の露命が繫げるだらうかと思ふと泣くにも泣かれぬ程心細く感じました

左う斯うする内四日の賜暇が出たので兵營には地獄に佛ともいふべき珍しく情ある小隊長から許るされて僅の暇を偸んで家に歸りました、其時少し許りの小遣のうちから父母への土產と十錢の餅を買つて歸りましたが、何事ぞ家には一片の食物もなく其持つて歸つた土產の餅で兩人の親が僅かに飢を凌いだ始末です、尤も其前に村役場から五十錢だけ贈つて下さつた事でしたが何んたる不孝ものぞ弟の

道樂野郎が持ち出して費つて了つたのです

私が家へ歸ると近所の人たちは出征の餞別として一圓の金子を贈つて呉れましたから其半分を家に殘して、心措きなくと云ひたいが實は未練の淚を隱くして親どもの家を立つたので御座います

運命拙ない人間は何處までも人並には行かぬものと見えます、私共が師團○○○列に編入されて遼東に上陸してからの難澁といふものは到底言語には盡されず、なまじ申して見ても同じく輸卒となつて戰地に行つて居る方の親や兄弟に氣を揉ませるが落ですから、イッソ何事も申しますまい、唯少さい時から貧乏に育つて骨折業には慣れて居るつもりの私が勤務中前後十二三回も卒倒したといふので大概御察が付くでしやう、夫れが爲め終ひに先月の二十三日後送せられて此廣島豫備病院に今は手厚い御手當を受けて居ります、何うせ碌な死に樣も爲まいとは思ひましたが一度決心した身がアチラの土にもならず空しく病院の喰ひつぶしとなつて御國の爲め所か御國の煩ひとなる口惜しさ、御察し下さい、ア、これも腑甲斐ない身の當然の運命といふも愚痴、輜重輸卒が軍人ならばと唱はゞ唱へ、自分ではこれでも軍人の端くれのつもりア、もう言ふまい、何も聽いて下さるな、たゞこんな人間でも御國の爲とならば何んなつまらぬ死にザマでもして御覽に入れるだけの覺悟はあるものと御思ひ下さい

○記者先生宿舍に迷ふ

滿洲丸乘員の京城に入るや、同地の接待委員等貴衆兩院議員の宿所のみを用意して新聞記者諸先生の宿割りを忘る、記者先生旅館を訪ふもいづれの宿舍にても「おあひにくさま」を喰ひ、炎天の路頭にさまよひ、半泣きの聲ふるはせて呼んで曰く「モシ〳〵私の行く處はどちらでござる」

（六月廿四日…小杉特派員寫生）

敵陣に餓死す

（坂井伍長の最後）

六月六日我野戰○聯隊○大隊が敵情偵察として四門子方向に進發するや騎兵中隊の二小隊之が前衞たり、此日終日敵影を認めず夜半遂に老爺廟に到りて警急舍營す、翌七日天明再び前日の行動を繼續し、山路の崎嶇を踰え、峻坂の磽确を踏み、朱家堡子西方千五百米突の地に達するや遽然として敵の數十騎右側街道に現れ、嶮を要し岨を扼し我を狙擊する事急なり我前衞隊長咄嗟令を傳へて之を擊ち、勝に乘じて北ぐるを追ひ、深く前面密林中に敵を尾擊し、遂に本隊と離れて遠く孤立するに至る、敵斯くと見るや馬首を

○韓國所見（一）　（小杉特派員寫生）

「朝鮮の新聞編輯室」日本文と共に韓文のも發行するが故に韓の文人な雇ひ入れて執筆せしむ、多くは内地の新聞のほんやくなり

回へして逆擊し來り、伍長坂井五郎七外一騎は忽ち其乘馬を殪されたり此に於て我小隊は馬を棄てゝ徒步敵と格鬪し、一以て十に當る、而かも敵は衆を恃みて大に到り、拳銃を發ち長槍を擲ち我小隊を包圍して一騎も餘さじと肉薄す、我兵或は傷き或は僵れ、坂井伍長も遂に頭部と足部とに敵彈を蒙り昏倒起つ能はざるに至り、敵衆迫りて伍長を拉し去り戰友の遺骸空しく敵手に委す、一隊等しく切齒せざるはなく且つ伍長の其場に即死せるを信ぜり、次日我隊大に敵を破り敵の一士官を虜へ、鞠訊して坂井伍長の戰場に死せずして敵中に憤死せるの狀を聞くに及び痛恨已む能はず、殊に其の最後の壯烈に至りては千世の上潔士夷齊を凌ぎ萬世の下懦夫を起たしむるの概あり、其壯烈と其皓潔と眞個人をして熱涙の滂沱たるを禁ぜざらしむ

伍長既に敵彈に足部を貫れて復た起つ能はず、敵衆之を拉して營舍に致し、軍醫は繃帶を携へて病床に臨ぞみ先づ創所に加へんとしたるに伍長始めて生氣に復し、痛傷に屈せず頭を左右に掉りて之を拒み、曰く我唯一死を期するのみ何んぞ甘んじて敵人の恩を受けんやと、之れを強うるも應せず果ては激憤怒喝殆んど近くべからず、軍醫已を得ず其昏睡に入るを待ちて治術を施せり、數時間の後伍長昏睡より醒め其創所の繃帶に裹まれたるを見るや、眼を瞋らし齒を咬み大喝して曰く、咄、醜虜何ぞ無禮なる敢て神州男子の四肢五體を飜弄せんとするかと、奮然起て繃帶を寸裂し軍醫の面上に擲つ、軍醫冷然として顧みず、溫言慰諭して曰く予は卿が力竭き虜と爲り而して死を怖れざるの膽氣に服す、然れども亦た卿の死所を知らざるの狹量を憐まずんばあらず、卿は今ま卿の祖國に對して負へる義務を全うし、力竭きて後遂に我軍の護る所となりたるもの、誰か卿の勇敢を認めざるべき、願くは意を飜へして我赤十字の惠みに由れと、尚も溫顏を以て食事を差めたるに伍長は眉間に刻まれたる皺に深き決心の程を示し、何物を差むるも口にせず、最後に數人の看護手其四肢を押へ、強いて口を割りて麵麭を與へんとすれば、看護手の指を咬み切り飽迄も抵抗して之を拒めり、此に於てか軍醫も遂に其志の奪ふべからざるを悟り、病床の上に横へたる儘放任し置きたるに、絕食三日にして終に餓死せりといふ、此の捕虜士官の言を聽きて伍長が壯なる最後の狀を詳にしたる我將卒は擧つて伍長の志に泣かざるは無かりしとぞ

臺山寺の夜戰

（得利寺役に於ける○○兵）

臺山寺の夜戰は、僕が今度の戰爭でこれ位心配したことは無い戰爭だつたが、其代り又これ位愉快なことは無かつた、得利寺大戰爭の前、恰かも六月十一日の事で有つた、我隊は或任務を帶びて臺山寺といふところまで前進した、ちやうど本隊を距ること約六里といふところまで來けれどウッカリ支那人の云ふ事も信用する譯にいかぬので、望遠鏡で以て遙かを見渡すと、成程ちらほら騎兵らしいものが見える、乍併情報が有つて、我隊の前方には我騎兵が活動して居るものと信ずる理由が有つたので、○○分我騎兵が歸つて來るものだらうと信じて居た、ところが支那人は頻に露兵が來た〳〵と注進して來る勿論我大隊でも決して油斷は出來ぬから、斷えず望遠鏡で見て居たが、まだ距離が遠いので我騎兵か敵の騎兵かとの判別はつかない、さうかうする内に日暮が近うなる、光線は薄らぐ、望遠鏡も充分の用をしないやうになる、そこで附屬の騎兵を斥候に出したところが、間もなく歸つて來て、支那人の知らせた通り敵の騎兵に相違ないと報告した、しかもそれが我占領して居る山の背後にまで廻つて來て夥しい數であるといふことまで分かつた、けれどモー日が暮れた進む

も退ぞくも敵の中、どうすることも出來ない、そこで大隊長から命令が下つた、今夜はこゝへ露營をすることにするとの事、けれど四邊皆敵、即ち我軍は袋の鼠といふ有樣だから、どうして安心して眠られる譯のものでない、則ち嚴重に警戒を加へて居ると案の定、我前哨の小隊前へ敵の騎兵が六七騎現はれたので、直ちに之を追ひ拂つた、すると今度は優勢な敵の歩兵がやつて來た、我前哨小隊は衆寡敵せず、やむを得ず背進した、それと聞くより大隊は直ちに第十一中隊を應援として急派し、中隊は奮撃突戰してとゞ此優勢の敵を撃退して仕舞つた、その戰爭がなか／＼愉快で、敵は支那人の家屋の牆壁に據て我に對して居るが、例の支那の牆壁といふと、田圃の周圍に三尺から八尺といふ高さで、厚さは一尺五寸もあつて、礫石交りのなかなか丈夫なものだ、容易に銃彈は透らない、敵の奴それを盾にして居る、そこで中隊長は一部隊を割いて敵の側面に迂廻させ、劇しく攻撃さしたが、これが非常に效が有つて、敵は竟にこの牆壁を捨てゝ退却せざるを得ないことゝなつた、そこで我は前進して今度はアベコベに敵の據つて居た牆壁に據り、敵を追撃した、かうなると占めたものだ、敵は牆壁に離れたから裸さ我軍は牆壁に據て居るから、體は見えぬ、非常な利益だ、敵はたまらないといふところで、一散に逃げやうとしたが、生憎前に一の牆壁があるそれがなかなか高いので容易に躋つて越えることが出來ぬ、昇りかけては辷り、辷りては昇りかける、我からは劇しく射撃をする、進退維谷といふハメになつ

○韓國所見（二）

韓兵當時の服裝を見るに、冬の洋袴を穿ちて夏の上衣を着す、宛然露西亞流也、常に銃劍を附して提ぐ、おのづからこれ新出來の兵士

（小杉特派員寫生）

て大狼狽、爭ふて其の牆壁の根方に腹這ひになつて、降參の意味か手巾を出すそこで降參といふから我隊では射撃を中止するすると横着もの丶本心を顯はして、腹這ひながら銃砲を撃つ、我軍は怒るまいことかコノ狡猾者めといふとこれから劇しく射撃したので、敵は竟にたまらず漸くの事で牆を越えて逃げて仕舞つたが、この際我彈丸に中つた敵の死傷は少なくなかつたらうと思はれる、夜の事だから敵が何程の屍體及負傷者を運搬したか分らぬが、我隊に收容した敵の屍體は三個で其中の一番大きな男は下士官であつた、敵は此の如く死傷者を出したに拘らず、我隊には指一本カスリ傷を負つた者も無い、思ふに其理由は敵の高い所から瞰射し、吾は低いところから仰射するから、

○韓國所見（三）　（小杉特派員寫生）

仁川沖海戰の當時、露艦より逃れ來りし犬あり其名をワリヤークと云ふ、形小牛の如し、常に京城居留地の間を往來して日本の小兒に養はる

晝間だと反對に我が怪我をするのだが夜だから互ひに正確の照準が出來ぬから、大槪は銃身が水平になつた所で射撃する、でゐるから我隊から撃つた彈丸は敵の胸腹から下肢へ命中するが、敵の彈丸は皆頭の上を通過して仕舞ふたから、我には一人の怪我人もなく、敵は少なからず損害をしたのである、此戰鬪で我中隊は再三吶喊を試み敵の陣地を奪つたが大隊にはそれが見えぬ五六百米突先きで、頻りに吶喊の聲が聞こえるが、敵が吶喊するのか、味方が吶喊するのか、見えなくつて聞こえる丈けだから、實に氣が氣でなかつた、本隊では敵の來進したので分つたので晝の内に傳令使の騎兵二名を隊へ向けて發せられたが、前にも云つた通り我大隊の周圍はまるで敵が押取り捲いて居たから眞直に來ることが出來ぬ、あちこちと迂回して翌十二日の午前四時頃にやうやく到着した、其命令が來たから、背進すること丶なる、諸方に出

してあつた斥候や監視哨を收容し、五時過ぎに陣地を引拂つて背進の途に就いた此路は臺山寺と他の一山との中間を通じて居るので、臺山寺の敵は果して我側面を要擊したが我隊は格別の損害無しに歸隊することを得て、敵の眼前を背進するのだから、成る可く荷になるものは先へやつて、徐々に行軍したが、この要擊に我隊は二名の負傷者を生じた、それがいづれも脚を擊たれて居る、擔架は先きへやつた、支那人を雇はんにも、ポン〳〵パチ〳〵の中だから一人もアタリには居らぬ、據無く支那人の家から戶板を二枚取つて來て、負傷者を載せて戰友に擔がせて引揚げた心配だつたがしかし面白かつたよ（某負傷將校談話の一節）

劍尖相摩

五月二十六日南山奪略の公報に劍尖相摩の語あり、此書柬は十五聯隊第一大隊第四中隊町田少尉の手に成りたるものにして其狀を說く太だ詳なり故に報ず

五月十六日我が師團は金州に向ひ貔子窩街道を前進中敵に遭遇し一戰十三里臺を占領し鐵道線路を占領し續いて金州城攻擊の準備に移つた內地の噂を聞くに我軍は直ちに旅順を陷れるなぞ云ふも却々ソー甘くは參らぬ、我が第一師團が十三里臺を占領せしとき既に敵は前方約二里の金州城に據守せるを見、其南方には南山の要害あり甚だ堅固の砲臺なれば內地人の想像の如く簡單には行かぬ、我々が滯在せし前半拉子屯は十三里臺後方約十七八町もある、處が敵の大砲彈は我が面前に落下すると云ふ勢ひなれば迂濶に近寄ること能はず、全く大雷雨を利用して敵前に接近し金州城を奪略し、南山を攻擊せし次第、第四師團にて金州略取の都合なりしも能はず、依つて我が第一聯隊金州城に躍込みたれば敵は退去を始めた、第十五聯隊は丁度第二軍の眞正面に當り居り困難せしこと到底筆紙に盡し難し、始め鐵道線路の後方に在りて砲兵戰鬪を見居り其の機に乘じて前進を始め夕方迄に五回躍進し遂に突擊に移りたり、此間約十四時間半に亘る

此五回前進を起したる瞬間の外は立つことなく畑中に倒臥したる儘射擊することで、頭も無闇に上ること能はず、頭の上を銃丸がシューと通る時は今度は自分の番かと思ふのもあり、戰友が負傷せるを繃帶し後方に送ることも出來ず、各兵は唯伏した計では敵丸に中る恐あれば伏すや否や特に携帶したる方匙（十能の如き鋤）にて腹下の土をガリ〳〵堀初め漸次身體を巧に其穴の中へ潛めて敵を射擊する有樣、浮かり立上ればスグ打たれるから一日マルデ打伏して、土を堀る、潛で射擊する、躍上つて前進する、又伏して射擊を續けたることなれば攻擊軍の困難は敵に百倍せり敵は穴の內に在りて機關砲（一分間六百發を打つ小銃砲）廿七八門を据ゑ其他大砲小銃南山の周圍に限りも無く据置き安全に射擊するを以て我軍

の前進する毎に畑中に倒るる者幾人なるを知らず、余等の前進したる先には五六軒の小家屋ありしのみにて其他は何も蔭になる掩蔽物なく、敵は前進すれば急射擊し我兵止れば敵は即ち穴の中に引込むと云ふ餘程御注文の良い仕掛なれば從つて我兵は非常の損害を得たり、前進中にも脚下や其前方に絕えず彈丸が落ちる故に止る迄にヤラレルかと思ひ驅足の速度非常に加はり愈々突擊せしに敵の死屍も濠中に多く、南山の頂上は砲臺、其より下に三段四段に步兵、機關砲兵の掩壕を作り、上段の敵先つ退却して中段之に續きしも最下段の敵は之を知らずして抵抗し、我が三箇師團の大軍一時に立上つて急射擊を爲すや、南山の途中を逃走するものは鏖殺と爲り、其時我軍の銃丸雨の降るより急なりし我々が突擊せしとき下段堡壘の敵は退却の暇なく大抵銃劍にて突殺され、首なぞの落るは容易なものにて軍刀なれば一刀にて忽ち落つ兵卒が銃劍を使用したること非常にて大抵頭及び胸の邊に突込み一突にした、我が突擊に對し降伏を爲さば箇樣のこともなきに强て抵抗したるが爲に遂に劍を用うる樣の始末に到つた云々

○韓國所見（四）

炎威赫灼、南風熱沙を飛ばすの午刻、我が歩哨兵滿身汗と塵とにまみれつつも尙儼然として前營に立つ

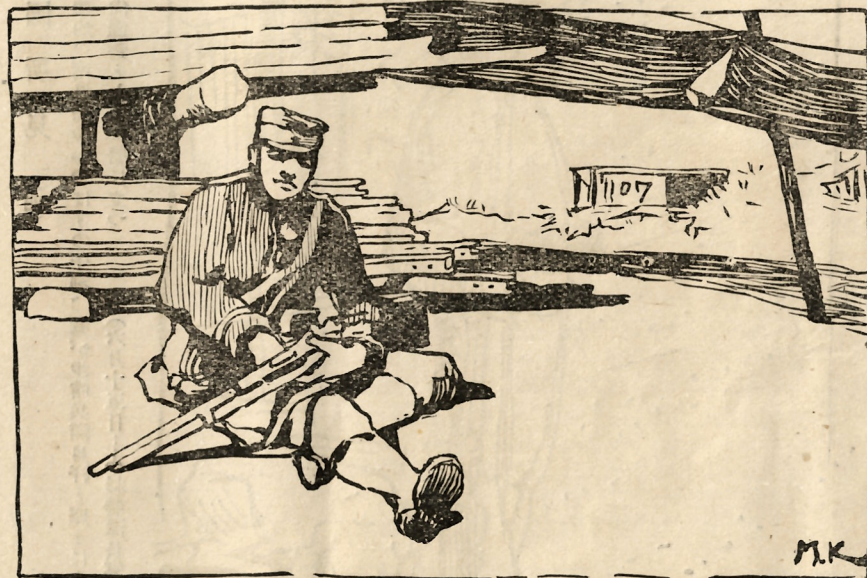
（六月十五日…小杉特派員寫生）

露助味をやる

（某聯隊第八中隊の猛戰）

得利寺の役、某聯隊第二大隊第八中隊は中央縱隊として十四日大沙河の線を出發し、進むこと約八里吳家屯に達す、傳騎あり軍の命令を齎らして曰く、大隊は明日我砲兵を掩護して某地點に前進すべしと、茲に於て警急命令は更に陣々伍々の間に傳へられ、先づ連日

進軍の勞を慰せんが爲め特に一日の休養を與ふ、此夜將士前途の快戰を夢みつゝ、戈を枕にして閑睡を貪れり、翌十五日午後二時全隊振旅して吳家屯を發し龐家屯北方に到るや、同地西方約二千米突の高地は既に敵の砲兵陣地を構ふるあり步兵亦之れに據りて防備頗る嚴なるを觀る、須臾にして敵の砲兵は我が縱隊の近接するを望見し、熾んに砲火を開き其の勢極めて猛烈なり、我は其の位地の攻擊に不利なるを以つて、敵の瞰射を冒して龐家屯北方に迂廻し、奮躍して其の高地に突進し、敵の構築せる掩堡を奪ひて之れに據る、敵砲兵之れを望み前日來測定せる着彈距離の好位置を利用し、榴散彈を發射すること雨の如く、我が兵砲聲に應じて倒れ、全隊の苦戰一方ならず、先頭に進みたる第八中隊の如きは高瀨中隊長及び特務曹長一名を除くの外中隊の首腦全滅するの不幸に陷いれり、當時我が隊は知らず識らず敵の十字火線に入り、進退共もに敵彈の威壓を受け、我より進んで

○韓國所見（五）　京義鐵道の守備兵（六月廿日…小杉特派員寫生）

射擊を開始するの餘地なく、全隊已むを得ず伏姿を取り、敵の縱擊橫射するに任かせ、以て日沒を待つの苦境に陷り、雷轟電閃の間遙に敵の喊聲を聞く每に我が兵空しく切齒頓足するのみ此の時第八中隊の吉富少尉は悶々に堪えず將に、身を起して前進せんとするや、砲彈忽ち附近に爆裂し、彈片散亂先づ同少尉を傷け、次で右側一間を隔てたる門司少尉を倒せり、門司少尉彈片を蒙ること三箇所に及び、顧みて『吉富擊たれよ』と叫び凄然一笑したるが、兵の來りて繃帶を施すの間もなく絕命せり、時に吉富少尉を距る左側數間に伏姿を取り居りたる葛原中尉岡田上等兵も同時に敵の全彈に中り兩人枕を並べて即死し、村田伍長亦全彈に臀部を射られ一塊肉は飛散せる血漿と共に地上に投げ出されたり然かも伍長は重傷に屈せず步み寄りて地上の肉塊を拾ひ捧げて衆に示し『露助味をやる』と、呵々大笑したる如き、全隊舌を捲いて其の猛勇に驚嘆せざるはなかりしといふ、蓋し第八

中隊は多く山陽健兒の集團にして嘗て北清事變の戰鬪に參加せる者、其の剛毅沈勇死を怖れず從容として其任務に勇奮するの狀率ね此類なり得利寺の役、第八中隊中央縱隊の位置に就きて最も苦戰激鬪の衝に當り、遂に能く敵の大軍を全滅せしめたる其功最も偉なりとす、即ち玆に其戰況の一斑を特筆する所以也

得利寺左縱隊の戰況

左縱隊は○軍の左翼より敵の右側を壓迫して其退路を斷たんとの目的なりし者の如く乃ち一枝隊は十三日朝他の中村聯隊と共に福州街道を得利寺方面に向つて前進の途中二回騎兵の衝突ありしも難なく之を擊退し同夜は無名部落に入り林中に露營す生駒中隊之が前哨となり散兵濠に散開したるまゝ一夜を明せり

十四日午前三時行進を始め得利寺より二三里手前に止まり其山間に露營す此日は兩三回小衝突ありしのみ彼我共に損害なし

十五日午前七時、輕裝して一同出發せんとせる際恰も指頭大の霰降り出せしかば內藤少將は衆に告げて曰く敵兵に遇へば此霰の飛散するが如くに隙間なく敵兵を射擊せよと衆曰く可と士氣大に振ふ午前九時前進の命あり諸兵勇を皷して猛進す少時にして軍司令官より命あり曰く內藤○○は中央本隊の前進を掩護せんため其先隊に立ち其攻擊に參與せよと玆に於て諸隊は縱隊となり息をもつかず目的地に向つて驀地に進む午前十時三十分得利寺停車場の附近に到着す時恰も炎熱爛くが如く途中兵の渴するもの其幾何なるを知らず午前十一時頃我軍斥候を放ち敵情を偵察せしめしに敵は天然の險要を巧に利用し以て我軍の前進を防止せんと計ること豫想の如し我軍は直に中村○隊と提携して諸準備をなせしが平地を往けば敵の射擊的確我は地物の據るべきなく其損害莫大なれば勢ひ山路を攀て進まざるべからず而も此邊の諸山蜿々として起伏し山を往くも野を進むも孰れにても行進の困難名狀すべくもあらず我砲兵來りて是等步兵の行進を援助せんとするも山路險惡砲車の運搬意の如くならず且適當の陣地を發見するを得ざりし敵は之を機に我に向つて猛火を放てり我軍之を意とせず山路を取り敵前近きは四百米突遠きは一千米突に接近して射擊を開始す此邊り一物の支ふべきなく爲に我の損害非常に多く忽ち下士卒四十六名の死傷者を出せり此時彼我の陣地の側方に當り獨立山上より頻りに旗を振りて合圖をなす支那人あるを發見せり最初はその何の故たるやを解するに苦しみしが敵砲步兵等が銃砲火の的確なるなどの事より漸くにしてこれ狼慾飽くを知らざる頑迷無智の支那人等黃白のために露に通じ山上より我軍の動靜集散の狀並に射擊距離など時々刻々悉く之を露軍に內應するものなることを發見す我兵怒髮天を衝くの有樣にて直にその山を包圍し山上に攻上るや彼淸國の狡奴等狼狽譬ふるにものなく一散に逃

走せんとせしが及ばず我兵之が辮髪を摑みて引倒し之を斬殺せり而して敵の打出す砲聲殷殷として益々猛烈を加へ硝煙濛々として天を掩ふ然るに此時篠突くばかりの大雨到り前途朦朧として彼我共に敵陣地を見る能はず敵砲兵沈默せしを以て我兵亦射擊を中止す然れども前來敵の猛烈なる砲火に進み兼ねつゝありし我兵は奇貨措くべしとなし却て此大雨を利用して猛進し意外にも敵の虛に乘ずるを得たるは何等の天祐ぞ斯て得利寺を距る約四千米突の處に進みし頃雨晴る（時に午後四時半）敵は我の前進を見て周章狼狽を極め總軍忽ち崩れ立ち列を亂して停車場方向に退却す我軍之を追擊して停車場附近に迫る敵は混亂しつゝも其砲兵は遙か後方より自己の負傷兵を收容せんため激烈なる砲擊を加ふ大野西尾の兩少尉江藤中尉を始め一等卒西井卯之助伍長西川壽一郎等多數此時負傷せり

敵は豫て得利寺の役敗亡することあらば停車場に集中し汽車に乘じて逃走せんとの手筈を定めありたるもの、如くして機關車は煙を上げて待ちつゝありしが敗兵の一部は既に二列車を發して遁れ其後も等しく皆茲に集中せしため大混亂を極め戰鬪は全然我の勝利に歸し敵の死傷一萬五千てふ前古未曾有の大大的多數を出したるにてありしとなり

○故鄕の音信

遠征幾閱月又家鄕を懷ふに違あらず、たまく家書至る、陣中披き見れば「御機嫌よう」より露西亞兵の首七ツの御みやげ」までは今年十歲なる男子の筆也、最後の餘白に十七字、これはやさしき女の手にて「菖蒲湯やいくさの留守の女わざ」

（六月廿日…小杉特派員寫生）

赤十字旗砲擊

此日午後二時三十分頃と覺しく我軍負傷者のために假綳帶所を設け其應急手當に從事中敵の砲彈頻りに到り危險につき山上高く赤十字旗を掲出したるに野蠻なる露軍は此旗目懸けて砲火を加ふ依て止むなく無慘にも負傷者に對して歩るけるものは疾く逃げよ歩けぬものは運を天に任せて擔架を待てと命ずるの餘義なきに至れり

右縱隊激戰

劍尖相接す――我將校敵將の右腕を切落す――敵少尉部下を斬つて士氣を激まし終に割腹して死す

六月十四五兩日得利寺南方龍王廟高地における右縱隊の戰報左の如し

十四日右縱隊は大沙河左岸を前進し右岸に移らんとする時午前十一時南瓦房店の東北方一基米突において敵の前進部隊と衝突して約一時間戰鬪せり此時敵の兵力は約步兵一聯隊、砲兵一中隊なり敵は此戰鬪において聯隊長戰死し數十名の死傷者を出せしが我は一兵をも損せず敵を追うて前進し午後一時三十分頃得利寺南方約九基米突にあり鐵道線路に沿へる王家店に達せり此時敵は龍王廟高地に二十四門の速射砲を備へ我前衛砲兵に砲火を集中す間もなく我が本隊の砲兵〇〇隊と〇〇隊を以て陣地に據り射戰數時間に亘れり右縱隊および騎兵隊は敵の側方に前進して龍王廟の東方約一里に進近せり此時敵は右縱隊に對し步兵一大隊半、砲兵一中隊に對せしめたり此姿勢において其日は夜を徹せり（後捕虜のいふ所によれば此夜敵は步兵一旅團を我右縱隊の前面に集め夜襲をなす計畫なりしが一聯隊集まりしのみにて他は道を失し時間を徒費したために天明に至り遂ひ

○韓民の火事場挊ぎ

六月廿七日の曉天、韓民火を失し街衢燒く、日本消防組、駐劄隊兵士、伊太利水兵等直に駈付て消防最も努む、時に韓の男女の水を運べるが、いかにも殊勝なりと見れば、何んぞ知らん彼等は一荷每に巡檢の手より若干の白銅を受けつゝありき、今更ながら呆れはてたる國民の根情かな

（小杉特派員寫生）

にその目的を達し得ざりしといふ）十五日に至り敵は尙ほ陣地に止まり猛烈に射擊すること前日の如し我が砲兵は龍王廟高地に猛火を集中し午前十一時過に至り敵の砲火大いに衰ろへたり此の間右縱隊正面の敵は續々砲力を增加し遂ひに步兵一箇旅團以上砲約三中隊を以つて攻勢に轉せし有樣にして右縱隊に密接して〇〇隊並びに〇〇隊は右縱隊と共に激戰その極に達したり午前十時頃敵の步兵一大隊餘（夜襲をなさんため集合せしものにして最も前方の村落の影に隱蔽しありしもの）〇〇〇隊に向つて突擊し來れり、その時我〇〇隊は銃劍を振てこれを追擊し彼我互ひに接戰となり我兵敵兵を刺せば他の敵はその刺したる我兵を側方より刺し又我他の兵は此敵兵を刺し某將校は敵の將校と接戰し其腕を切落し我將校も亦負傷する等戰鬪最も壯烈なりき此戰鬪中敵の將校にして面白き活劇を演じたるを見たり即ち東部西伯利亞狙擊步兵第二聯隊附少尉アレキサンドル、サフロイツチノーリエンなるもの（名前は死屍の傍にありし名刺に依る）あり初め突擊せんとする時露兵の內多數逡巡するものあるを見該少尉は刀を揮つてその二三名の頭を切り士卒の士氣を激勵し軍氣を振起せしむるの動作に出でたり然れども其後敵の突擊は遂に其効を奏せず露兵の將に全滅せられんとするや彼少尉は又部下の負傷者二三名を切り弱兵をして日本軍の捕虜とならしめざることを示し激鬪の末其場に自殺を遂げたり露人にして割腹とは實に稱讃せざるを得ず右の如き激戰を以て〇〇隊は二倍以上の敵に對し勇戰奮鬪せり十五日正午過頃に龍王廟附近の敵は全く沈默し午後零時四五十分の頃より敵兵退却の摸樣あり我步兵は攻擊前進す午後一時半頃龍王廟の高地は我有となり敵の陣地は我中央隊に奪取せられたり〇〇隊並に我〇〇の左方第〇〇〇の方面に尙戰鬪激烈なれども中央を突破せられたり敵は兩翼に峻險なる山ありて退路を失はんとせる狀況に至り遂に已むを得ず退却を初めたるも既に中央に突入せる我〇〇步兵は右に向て射擊し或は左に向て射擊し殊に〇〇隊の前の敵は全く包圍せられたる姿となり斷崖の谿底を退却し初め我兵之を猛射し敵の殪るゝものその數を知らず或は窮鼠反噬的に我に向つて突進し來るものあるも悉く刺殺せらるゝ樣實に慘憺たり此有樣にて午後一時に至り全く敵を擊退し射擊は止みたり而して我は敵の陣地附近の村落に露營せり戰場に遺棄せられたる敵の屍體にして我軍の掃除隊が埋葬せるもの約千七百名分捕品砲十七門彈藥匣多數、小銃八百挺其他糧秣等多數あたり

南山攻擊餘談

南山の激戰に參加したる某將校が戰ひ正に酣にして伏屍累々鮮血泉をなすの慘景中に立ち一隊の部下を指揮しつゝ親しく目擊せし實地談を聞くに將卒の沈勇今更ながら敬歎すべきものあり今其一二を左に錄す

▲瀕死能く命を守る　予（將校）は出征に先だち戰場の光景を想像して負傷又は戰死者の爲め戰場の士氣を沮喪せんことを憂慮し部下に令するに沈默を守りて敵彈に中るも叫ぶ勿れと、斯くて五月二十六日の南山攻擊に臨み我一隊は午前十一時頃散開して第一線に立てり敵彈雨の如く士卒傷つく者多かりしも那の訓示を守りて誰も叫聲を發するものなく全隊爲めに負傷者の多きを知らずして志氣毫も衰へず其內敵機關砲の一彈破裂して一兵士は面部を射られしが默して數步の後方に退きたり此時予はフト振向きて件の兵士が顏面唐紅に血を以て蔽はれ眼ばかり光らして予を目しつゝ微笑を洩らすを見たり此瞬間の予が胸中果して如何ぞや慘又慘予は一言以て慰めんと思ひしも平素訓示したる嚴命ありて沈默を破り難し感極まりて爲めに一掬の涙を禁ずる能はざりし去るにても彼が重傷を負ひ死に瀕して尙能く平素の訓示を守り一言も苦叫を放たざりし勇氣と沈着とは一軍の士氣を鼓舞すること幾干ぞ予は愛憐の情に堪へず竊に手を取りて後方十五米突の家屋內へ入らしめたり此兵士は名を秋葉清之助といふ

▲小隊長の危險を救ふ　此役に於て敵は高地より我を瞰射し砲擊最も烈しく第一線たる予の小隊は正面に之を受けて彈雨の下に散開せり是より先き兵士は皆背囊を後方に卸ろして散開したれば時已に正午なるも晝飯の糧なく士卒皆空腹に苦しむ予は幸に明珍塗の背囊を負ひ中に米飯の行厨ありしより直に取出して一同に分つ兵士皆天下貴重の米飯數十粒を手にして彈丸雨の如き中に立ち悠々と其一粒をだも失はじと之を喫し腹が空いては戰が出來ぬなど、戲言を弄するものあり勇氣一層振ひて戰線頓に活氣を添へたり時に敵の砲擊益々烈しく予の身邊に集中せり部下の一等卒宇田川秋太郎なるもの之を見て予に向ひ小隊長の背囊は樺色にして敵の好目標なれば危險なり乞ふ取外されよ小卒之を後方に持ち行か

○御守に困る兵士

弓矢八幡守らせたまへと出征の當時餞せられたるさまざまの御守札、流石の兵士も背負ひかねけむ

（社友岡本月村子寫生）

んと云ひ自らその予の背後に廻りて取外し彈丸を潜りて遙後方なる麥畑の中に持行き立歸りて平然たり其一身の危險を忘れて隊長を思ふの情斯くの如く切なるは我軍の大勝を得し所以偶然ならざるを知るべし

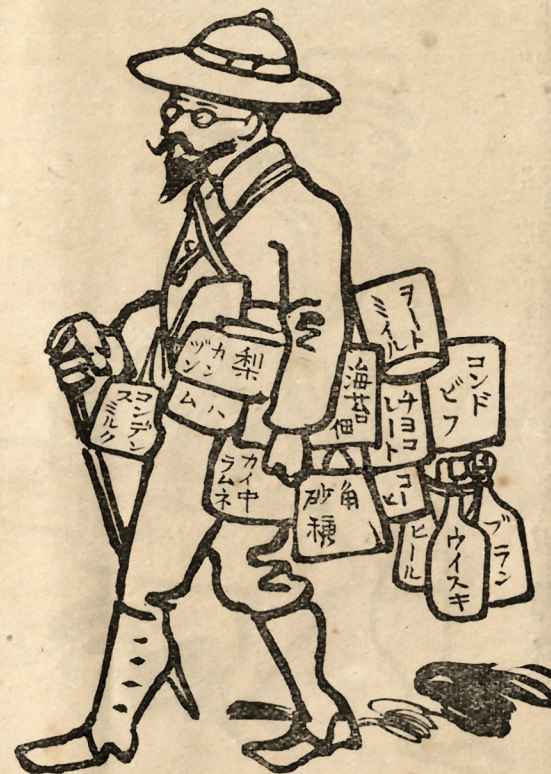
▲大隊長部下の生死を確む　混戰亂爭今や進んで敵と銃劍を交ふるの場合近づきて我一隊は敵前七百米突の近距離に迫りぬ此時後方にありし大隊長岡部少佐は偶大藤中尉戰死せりと聞きて少しく指揮の閑を得たるに際し敵火を冒して此方に來られしに豈圖らんや戰死と聞し大藤中尉は尙勇氣凜烈劍を揮つて戰線に立ち大隊長を見て喜色滿面之を迎へたり少佐は一見して何事をも云はず戰況を視察して立去られしを其時中尉は何事とも心付かざりしが後に我生死を確かめん爲め態々來れしものと聞き中尉感激して上官の慈愛を謝し竊に征衣の袖を霑ほしたりと

○食道樂の從軍記者

昔は辨慶軍に七ツ道具を携ふ、今は記者先生腰に食道樂を附く

（社友岡本月村寫生）

戰友の最後

左の一篇は小林三吉氏が其戰友佐倉第二聯隊第○中隊上等兵小澤春吉氏の死狀を記して其遺族に贈りたるものなり

（前略）ア、三吉は茲に一つの慰藉者を失ひたり左るにても五月十六日は三吉の永く記臆して忘る可からざる紀念日なり此日三吉は春吉君と共に重大なる命令を受けて僅かに二人老虎山麓に潜行し或る任務に從ひぬ、日淡うして雲頻りに北に走れり、詳かに敵情を盡して本隊に歸らんとせしに敵の哨兵は早くも我等二人を認めたりけん俄かに熊笹の間より躍り出で、我等に發銃しぬ、這はしまつたと思ひたれども咄嗟身を交はして大地に伏し彈丸の有らん限り彼等に向つて狙擊せしが敵は追々に集まり來りて凡そ七八十より百二三十の多きに上りたる故今は到底死するの外なしと觀念し尙ほも射擊を繼續し時には味方を多數らしく思はせんためワアーワッと大聲

分水嶺占領支隊長　少將淺田信興氏

分水嶺占領支隊長　少將丸井政亞氏

常陸丸遭難負傷者

武本與三吉氏　小谷卯太郎氏　菊池喜平氏　渡邊三造氏　田所龜松氏　吉野勘太郎氏　不明
林加藤次氏　小河竹三郎氏　森田五郎氏　直原治太郎氏

南山負傷者
步兵少尉水澤源治氏

分水嶺占領支隊長
少將東條英教氏

南山重傷者
步兵大尉淺野丈夫氏

南山負傷者
步兵第一聯隊長
大佐小原正恒氏

裝甲自働車

南山負傷者
步兵大尉寺崎由之助氏

南山戰死者
步兵中尉松岡包久氏

南山戰死者
步兵大尉堀内久次郎氏

南山戰死者
步兵中尉石津完造氏

南山戰死者
步兵少佐高田宗城氏

南山戰死者
步兵中佐藤岡敍次郎氏

南山戰死者
步兵大尉唐渡貞吉氏

南山戰死者
步兵中尉芝川又三郎氏

南山戰死者
步兵大尉野本　瓘氏

南山戰死者
步兵大尉福田房五郎氏

南山戰死者
步兵一等卒岩田藤松氏

得利寺戰死者
歩兵大尉林宇吉氏

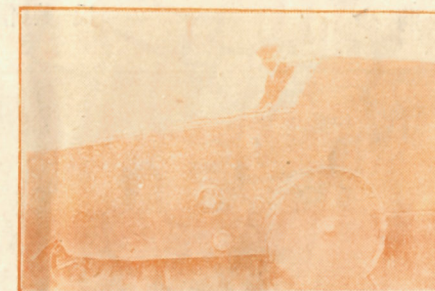
南山負傷者
田門謙一氏

得利寺重傷者
歩兵大尉市岡赳夫氏

南山負傷者
歩兵少尉山崎忠藏氏

不幸なりし佐渡丸

（破壞後六連島に於て撮影）

佐渡丸の排水喞筒

に叫んでは見たれど敵はビクともせざるのみか果ては全力を擧げて掩撃し來たらんの模樣なるより兎に角遁げ得らるゝだけは遁げ延びんものと崎嶇たる山路を疾風の如く駈け降りんとする一刹那敵が釣瓶打ちに打ち出したる彈丸は遂ひに春吉君の肩を貫通し更らに三吉の右脚部を擦過し行きたり、春吉君がドウと倒るゝや三吉も亦た倒れたり、血潮は泉の如く流れ出して忽ち我等の全身を染めたり、されど二人は未だ死したるに非ず三吉は先づ云ひぬ『小澤君、たしか乎』君は答へたり『ウム大丈夫だ、君は何うだ』三吉は直ちに懸念すべき程にもあらざる由を告げたるに君はムク〳〵と起き上がりて『では行かう兎に角復命しない内は死なれない身だ』と三吉を促がし再たび木の間隱れにヒタ走りに走りて後物の七八丁も來りしかと思はるゝ頃君は突然朽木倒れに倒れたり而して苦しげに呼吸しつつ曰く『賴むよ、僕は駄目だから君は僕に構はず行つて呉れ玉へ』三吉はソンナ氣の弱い事を言ふ者でない』と勵まして抱き起さんとしたるも君は頭を左右に打ち振りて中々に聞き入れざるより三吉は『では仕方がない、けれど君の讐は討つて遣る』と云ふて涙を揮つて別れ急ぎ本隊に合し委細を報告して直に前進を始め以前の處に至りしに君は其の時まで同所に倒れ居りしが本隊を見るや否や蹌踉く足を踏み締めてヌックと立ち上り『萬歲萬歲』と叫びたるまゝ遂に絶息して漢土の露と消えられぬ、目前に此壯烈なる君の最後を見たる本隊の將士は一人として暗涙を浮べざる無く一人として君のために報復の事を誓はざるは無りしが老虎山遂に我が軍の手に落ちて君の志酬ゐられたるはや、悶を排するに足る可し、されば御兩親樣御親戚樣に於ても勇ましき君の戰死に依りて其の愁の十分の一をだに拂はるゝ事あらば幸に豈に三吉一人のみならんや

面白い逸事

第四聯隊第九中隊の一等卒菅野源之助氏は六月七日張家石の戰鬪で第一番に右脚の大腿を一發打たれて跛足曳き〳〵前進すると又候第二丸に右脚の大腿骨を遣られシマッタと叫びバッタリ倒れたが勇氣は倍々加つて伏しながら射擊を繼續して居る間に到頭右掌を貫かれたので銃を放したがソレでも挫折む色なく、ア、仕方がない腹が減つた〳〵と戰友からビスケットを貰ひ嚙りながら又跛足曳き曳き徒歩で繃帶所に往つたさうだ驚くべき剛勇の士だ、第四聯隊第十一中隊の伍長大和田貞之助氏は五月一日九連城北方高地占領の時敵の砲丸銃彈は迅雷强雨の如くで隊長堀田大尉以下死傷夥しくその身も敵砲の丸子で前額を傷けられ右腕を貫かれなほ進まんとするを上官に引止められ遂に定州の病院へ送られ病床にあッても腕が鳴て堪まらぬ〳〵と獨り

口惜がつて居つたが近頃病院を脱走し全快と僞つて隊に戻り隊附軍醫に勘付れて大に叱られて再び治療を受けたそうだ隨分強い男だ、第四聯隊第九中隊の一等卒櫻井虎松氏は平素から小唄が好きで暇さへあれば美音を弄して自ら陣中の徒然を慰めて居たが去七日張家石の突貫に敵味方雙方劍尖を接し激鬪の最中これが最後の謠ひ納めぢやと吶喊聲裡に最も得意の小唄を遣りつゝ突入つたそうだ胸中閑日月ありで斯く死地に臨んで平常の嗜好を擅にするとは面白い人だ、第四聯隊第三中隊の軍曹星桝藏氏は五月一日九連城の戰鬪に己れの小隊長加藤長右衛門氏が胸部と右腕に重傷を被り擔架で後送さるゝに臨み大に別れを惜しみ加藤氏の鮮血淋漓たる手袋を紀念に請ひ受け以來何處にあるも此血のついた手袋を上座に置き加藤小隊長の面前にある如くにその身を持し敵前に進む場合には誓て小隊長殿の御名を辱しめ申さずと慇懃に手袋に出陣を告げて後出發するさうだこれも今時珍らしい男だ

○皇軍の威勢——支那人の同情

我が遼東上陸軍、到る處支那人の歡迎甚しく、某斥候騎兵の如き、遠く敵情を偵察せんため或村落に着したるに、四五の支那人來つて最敬禮をなし轡を止めて曰く、イーペンピン(日本兵の事)少數にて行くことなかれオーコーピン(露兵)多數此の村落の先に居れりと、いと叮嚀に教えたりと

(蘆原特派員寫生)

露國と歐洲

倫敦『タイムス』投書家

露國に味方する人の多くは露國を以て歐洲のチャンピオンとして亞細亞人種なる日本人の野心に對して戰鬪しつゝあるものとなし歐洲人が總て露國に同情を寄せん事を要求す吾人は露人が是迄露國民を以て歐洲諸國民と其の主義精神を全く異にする國民なる事を表白するに熱心なりし

を記憶するが故此の要求に對して奇怪の感なき能はず彼等は常に露國が歐洲の他の邦國と別種の邦國なるを論じ若くして雄壯なるスラヴ人種の文明と老いて衰頽せるチユートン及びラテン人種の文明との間には共通の點甚だ少きを唱へて以て自ら誇れり五月十五日の『ルタン』に載せられたる一文は露人の思想が歐洲諸國民の思想と著しく異る事を證明すべき一片の材料を提供せり即ち同紙の記者が引照したる『ノウォエ、ウレミヤ』の軍事批評家の説の一節是なり其説に曰く露軍の背後に病院を設くるは無用の事たるのみならず實に有害の事

○航海中の萬歲

内地歸航中、屡々陸兵を滿載せる運送船と相遇ふ、右舷左舷、彼れ行き我れ去るそのたび毎に兩船より發する萬歲の聲、あゝ其聲の悲壯なるよ………

(七月五日於船中…小杉未醒子寫生)

なりと云はざるべからず是れ只だ兵士の怯懦心をして增長せしむるの用をなすのみ戰爭は斷えず兵士に向て獻身犧牲の精神を要求す然るに此の精神と相容れざる病院を設置せんとす愚も亦た甚だしからずや斯の如き道德の衰頽と利己心とに用ある制度は戰地に於て何の必要あらんや戰爭に於ける仕事は死するにありて療治せらるゝにあらずと

『ル、タン』の記する所によれば此の軍事批評家は露國の陸軍社會に於ける頗る有力なる人物にして其の思想精神は露國の軍人社會の大部分に共通のものあり斯の如き思想精神を有する露人は歐洲文明より遠かる事甚だ遙かなりと云はざるべからず之に反して海陸軍に於ける日本の衞生制度のみを觀るも吾人は日本が露國よりも大に歐洲文明に接近せるを知るなり然らば即ち歐洲文明を代表して戰ふものは露國にあらずして日本なりと云はざるべからざるにあらずや

露の弱は專制の爲

（佛國學者の日露戰爭評）

有名なる佛國の歷史家セーニョボー氏は此程『軍國としての露國の菲弱』と題し「歐羅巴」紙上に論じて曰く

露國が强國の列に入りたるは千七百九年ボルタワに於て瑞典の軍を破りたるに始まる然れ共此戰に於ては敵は小國にして且つ充分の組織を有せざりしが故にこれを以て露國の强大を證すべきに非ず而して露國は其薄弱なる敵と戰ふに際しても失敗したり然るに今や彼は始めて組織ある國と戰を交ふの機會に遭遇し始めて自國の國力を試驗せらるゝに方つて日本の迅速なる進擊的戰略によりて非常の敗北混亂に陷り曾て露國が其小敵に對して取りたる失敗の歷史を繰返しぬ

今回の場合に方ては露國の受くる所の打擊は非常に大ならざるべからず何となれば日本は『敵をして回復するの餘地無からしむべし』といへるを原則とせる近世の兵法に遵ひて露國に對しつゝあれば也蓋し露國が近世的の戰法を運用する能はずして常に軍事上に於て失敗を招くは其族長的專制政治の故にして若し露國にして軍事に於て强くなり財政に於て自國の信用を維持するに足るの境に進まんと欲せば必ずや近世的國家が依て以て其富國强兵を致せる基礎に立ちこれを自國に採用せざるべからず然れ共現在の政府を顚覆し皇帝を取去るの要なしたゞ近世的戰爭は專制時代の戰爭と異にして治者と被治者との合同一致を保障する所の近世的制度を根本と爲すの必要あるが故に新聞紙の檢束を弛くし適當に民意を暢達することを圖るべきのみ

南山戰死者追弔會概況

明治三十七年六月十八日午後六時金州城南に位する南山々巓第二軍忠死者瘞骨木標の下に於て大追弔會擧行せら

れたり本派本願寺連枝積德院大谷尊由師布敎使吉見圓藏花田凌雲谷口常之の三師を隨へ鄭重なる式典を擧行さる參列者には古谷第○軍兵站監以下各部員及び戰死者に緣故ある將校下士兵卒數百名並に當時出征軍隊慰問の爲め出張中の伊藤侍從武官尾藤東宮武官第一師團布敎使川上貞信師等あり時固より各部隊共進軍動作に日夜多忙を極めつゝあるに際し此の如き參列者を得たるは戰死者も大に以て光榮とするに足る瘞骨木標は南山の最高峰に立ちて東面し右には柳樹屯南關嶺を隔てゝ遙にダルニーの市街を望み左には金州城肯金山一帶目睫の間に收まり後に金州灣を控へ前に大連灣を俯瞰し當日海陸の戰地歷々指點すべく參拜者一同低徊去る能はざるの感あり式典の順序及表白文は左の如し

午後六時　一同整列
導師表白
四奉請
甲念佛
阿彌陀經　此間參拜者燒香
甲念佛
合殺
回向
後唄

表白文（導師朗讀）

敬白釋迦善逝彌陀願王一切三寶而言、弟子尊由飛淨錫、爰修一坐法要、
恭惟
吾叡聖文武　皇帝陛下、夙張維新之宏謨、遍布文明之德政、
皇圖愈鞏民庶益豐、

○水平線上の一孤島

玄海の夜の波静にして四顧浩ゝ、鼓側時に愁ゝの鬼哭を聞くが如きは何ぞ、星淡く半月上る、認め得たり水平線上の一孤島、傍に人問へば即ち沖の島なりと云ふ、あゝ常陸丸、あゝ佐渡丸
（七月五日夜船中…小杉未醒子寫生）

前扶獨立于韓國暴凶服、後鎭騷擾于北清王道明、爾來帝、威被宇内、國光照四海、然蠻露之狂暴恣猖侵略、東洋之平和將至無望、是以、我皇震怒、大詔煥發、水陸之師、忽殲敵軍之營、連戰連捷、屢奏絕世之功、今茲孟夏之候、我第二軍、電馳直突金州、堅城失守、敵軍震駭、遁扼南山之險、惡戰奮鬪、從晨而至昏、天日爲暗、乾坤爲碎、虜營終陷、凱歌高揚、然痛哉、毒彈頻殞忠勇之命、將卒斃鋒鏑者不尠、永勒忠勳于金石、雖餘榮堪羨、現歡迎于凱旋、則遺恨何限、爰面於南山墓標之下、恭設道場請諸佛之降臨、讀誦妙典仰三寶之冥加、庶幾以期功德、普施一功、洪發道心、往生樂邦、伏乞三寶照鑒

式典終りて南麓に於て分捕火箭を發射し追弔會の終を告げたり時に午後八時

戰士の實話

茨城縣那珂郡瓜連村字中里
第二聯隊第五中隊豫備一等卒　寺門貞之助
(右上膊下部貫通銃創)

私は淺野大尉の第五中隊で第五中隊は死傷者を出した第一等です先づ戰死が八名負傷者が二十三名總計三十一名もあるのです何故第五中隊に一番死傷者が多いかと云ふに夫れは此中隊が第一線中でも最も早く敵に近い所に進んだからで其第五中隊の中でも飯野少尉(末吉)の第二小隊が『左へ散れ』の號令で他の隊の行進中眞つ先に散開したので小隊長飯野少尉は負傷し大隊中の戰死は悉皆第五中隊に引受けた譯なのです私は正面の敵を打ち拂ひ右に方向を換へ山を越へ背嚢を卸し前進して伏射中負傷致しました

茨城縣東茨城郡竹原村大字羽取六十九番地
第二聯隊第五中隊一等卒　吉井安之助
(頭部擦過銃創)

私は死傷の最も多つた第五中隊の第二小隊の第二分隊で分隊長は加藤軍曹(榮次郎)分隊の總員は十三名でありますが其中に戰死が三負傷者が三人あります其戰死の一人は飯田上等兵(寅次)で是は長い間背嚢を負ふた儘で苦戰を爲てやつと『背嚢卸せ』の號令がかゝつた刹那に咽喉に敵丸を受けられ嬉しやと思つた許り到頭背嚢を卸さない間に即死し又相馬一等卒(勝造)は敵前七百メートルの時右側面の敵より腦を打たれて假繃帶所に運ばれたのですが是れもやつとの事で繃帶所に行き着いて是れから繃帶と云ふ所でモウ息を引き取りました猶獨りの山崎友芳も同じく右側面の敵に遣られて戰死しましたが私も此前後に頭部を遣られましたのです

千葉縣長生郡豐榮村字千田
第二聯隊第五中隊豫備一等卒　平野安太郎
(右上膊部皮下貫通銃創)

私も第五中隊ですがモウ占領しやうと云ふ所で伏射中右腕を遣られて當つたとは思ひましたが血が出ないから好いのかと思つて居ると腕が痿れて利きませんから一時繃帶して休んで居ました第五中隊の戰死者八名は吉井君の云つたのが三名と最も壯烈な戰死を遂げた鈴木伍長(五十二)と鈴木三之助、石橋丑松、白石辰之助夫れに淺野中隊長の從卒で最も可愛がられて居た糸賀常助であります

千葉縣山武郡松尾町猿尾
第二聯隊第二中隊豫備一等卒　井上龍太
(右拇趾根部擦過銃創)

老虎山の戰闘で他の中隊は背嚢を卸し輕裝したのでありますが我第二中隊は丁度次から次と前進、射擊、前進、射擊で到頭背嚢を卸して居る暇がなく戰闘終る迄背嚢を背負つて居ましたこんな風ですから小木谷中隊長などは負傷されながら『ナアニ何ともない』と云つて敵陣を占領する迄中隊を指揮致されました私は右側と左側の敵から交叉射擊を受けた時に足を遣られて中隊長さへあれだから遣れる丈け遣らうと思ひましたが足が自由になりませんので上官の許可を得て後方に退却しました

茨城縣那珂郡中野村字中根
第二聯隊第五中隊一等卒　安忠七
(右手背貫通銃創)

私は未だ背嚢を負ふて伏射して居る内でした何だか右手が變だと思ひながら既に裝塡した丸だけ打つて直ぐ後を裝塡しやうと思ふと手が利きません其筈です此通り此所を遣られて居ましたから……

○滿州丸の一行車を列ねて京城に入る
(六月廿四日…小杉特派員寫生)

千葉縣長生郡豐田村字長尾
第二聯隊第五中隊一等卒　鈴木才助
(右下腿前面貫通銃創)

私も未だ背嚢を負ふて居る內でした山二つを越して戰ひそれから敵に向つて前進中スツと來て何か來たナと思ふとモウ遣られて戰友の菅谷和平次が來て助けて繃帶して呉れ擔架卒に負はれて後方に退きました

原籍未詳
第二聯隊第一中隊上等兵　本橋安造
(右上膊軟部貫通銃創)

私は第四回目の停止の時敵を去る千二千メートルで射伏中に遣られたのですが此戰闘中に老虎山一名大和尙山の東方中腹に二十人許りの將校らしいものが顯はれ出たので我騎兵が斥候に行と何でも外國武官であつたとか云ふ話しでした各中隊で日の丸の旗を立てたのは害にもなり德にもなつたとは我々の評判ですよ此旗を立てるのは彼我の區別を明瞭にする爲めで各中隊に一本又各小隊に一本宛持つては居ましたが中隊の旗だけで餘り敵の

目標になつたものでからす小隊の旗は持つて居た許りで立てませんでした

◎眞個天佑　小原大佐曰く金州の役の大雷雨は我軍に三個の著大なる至便を與へたり、第一敵に運動を知らしめずして豫定の陣地に達せし事、第二地盤の雨に洗はれたるため地雷の所在の明なりし事、第三敵の小心なる探照燈も雷雨ありて再び照さず威嚇砲擊をも中止したる事、是等をや眞個天佑といふべからん

◎士氣旺盛　又曰く我が下士卒の沈毅なる行動更に平素の演習に異らず寧ろ活氣を帶るだけに成績佳良にして士氣の旺盛なるは其軀幹長大なる露兵を物ともせず單身能く二三十人の敵中に突擊して之を走らすを見ても知るべし之に反して露兵は此矮小なる日本兵を見れば忽ち怖氣附きて潰走するなり

◎仇を討て　今井少尉曰く、一彈ピユーと飛來り一兵バタリと仆る仆れたる者は戰友を呼んで彈丸を交付し『遣られた仇を討て吳れ』

◎お先きへ　余（今井少尉）部下の兵の仆るゝを見て駈附け其致命傷なるを見て『しつかりしろ遺言はないか』と問ふ『何うぞ水を一杯』水筒を口に宛行へばゴツクリ一口『ア、好い心持ちだ、何も遺言などは有りません小隊長殿、さらばお先へ……

◎突貫々々　又一兵卒あり敵彈に仆る遺言を問へば曰く『早く突貫々々、敵を鏖殺に……』

◎眞個の戰爭　看護卒飯村某銃火縱橫の間を奔馳して單身死傷者を收容すること二十五、全身朱を浴び恰も大傷を負ふものゝ如し伏屍累々たる間に坐して靜かに飯盒を開き流血淋漓たる手に箸を運びつつ曰く、ア、今日が眞個の戰爭だ

◎曰く不知　一見勇壯なる露兵捕虜となりて來り糺問を受く、汝の軍團長は誰ぞ、曰く不知、師團長は、曰く不知、旅團長は如何、曰く不知、汝は何人の爲に戰へるか、曰く不知、唯知るものは小隊長の名と月給受取の日子のみ

◎活人之劍　佐藤博士（進）の手術は曾て李鴻章をして活人劍の神功に驚嘆せしめたり步兵第三聯隊第三中隊附今井少尉（與志雄）左肩より肺を貫き彈丸腹部に止り咯血甚しく頗る危篤なりしに博士一たび刀を執つて截開留彈を摘出するや氣色頓に變じて談笑健者に異らず以上數則の佳話を傳へぬ

◎此の通り足は大丈夫　開戰以來我軍の兵士は種々の場合に於て屢々勇敢の狀を現出せしが金州南山の激戰に於て步兵第一聯隊の某一等卒は敵に向つて前進する際敵彈に足部を貫通されしかば軍醫應急手當の上本國に後送せんとせしに某は足の痛み烈しきに係らず故らに幾度か其の足を上下して軍醫に向ひ『これ此の通り足は大丈夫です』と述べて後送を肯んせず種々說得の上後送と決するや戰友に向ひこれ位の負傷にて歸國しては知人に逢はす面目なしと殘念がりたり

◎隊長殿用便が　同じく南山の激戰中敵彈雨下の下に突擊する際一兵卒は隊長に

◯南山激戰補遺

(萩原特派員寫生)

（一）南山の激戰後敵の死屍を檢したるに銃傷少なく多くは砲傷なりしと云ふ此役敵は砂袋を以て圍ひ堡壘を堅固に構へたるが故に我步兵の射擊其の効なく敵の敗走せるは主として我砲兵の力によれり尤も敵は茲に半ば永久的防禦工事をなせしと見え堡壘內には婦人小兒の玩具等多く遺棄しありたりと、（二）彈丸縱列の兵多く敵彈に斃れたるを以て已むなく一兵士にて馬七八頭づゝを引連れ砲彈を運搬したりと、（三）我負傷兵一時敵彈を避けんがため五十米突の近距離を匍ひ行きしに背負ひし外套及袋に七發餘の彈痕ありしと、（四）假繃帶所に集められたる兵士等皆藥を塗りて其の傷所を靜養しゐたるが痛みに堪へず屢々叫聲をもらせしに夜深くるまゝ三晝夜も睡らざりしため遂には傷痛をも打忘れて熟眠したりと、（五）我砲兵陣地は最も好地位にあり敵を砲擊するに都合よかりき敵は砲射幾百發なるも毫も我に命中せざりしが大に苦み遂に風船の一計を案出しが我砲兵陣地を觀察して始めて有効彈を發し得たりと、（六）南山の戰がいかに激烈なりしかは此の一事を以ても知り得べし某騎兵の馬首敵の機關砲彈廿一發を浴せられたり而して此馬は運強くも無事なりし、（七）水中に伏射せし兵士は困難一方ならず大抵廿發目毎に銃口を洗はねば泥にて裝彈し能はざりしと當時我が兵士が苦心の度察せらるべし

向ひ『隊長殿大便が催しますから許して下さい用便して置かないと本當の突撃が出來ません』沈勇の狀觀るべし

◎戰塲の急救法　兵士の沈着にして注意深き戰友の負傷すると見るや敵彈の飛來は物かは直ちに馳せ行きて豫て各個に用意せる三角巾より血止藥など取出して衛生隊の來るまで適當なる急救法を施すこと過つこと無し

◎彈藥の節約　射撃には靜射と常射と急射の三種ありて演習の際など靜射と命ずるも兎角に常射となり常射と云ふも動もすれば急射に流るゝ弊あるに實戰に於ては兵士皆命令を待つまでもなく各々自ら注意して彈藥の節約に重きを置きたり

◎敵の射撃式　金州南山の戰に於て敵の射撃方を見るに敵は堡壘の銃丸に依りて發砲し之に對して我砲兵より應射すれば敵發砲を中止し我步兵の少しにても前進するあれば又々發砲す是れ彈藥節約の法に叶ひたるものにして敵兵の訓練も行屆き居れり

◎目標が見えぬから　我兵の射撃に至つては一層立派なり的確に目標の定まらざる限りは無暗に發砲せず將校の『ナゼ打たないか』と叱すれば『目標が見えませぬから』と自若たり

出鱈目の記

▲戰場の新利器

矢野龍溪述

萬國平和會議にて禁制せる戰時の風船使用も七月下旬迄の由なるが、右を兩軍にて用ふるや否やは、別問題とし、其外將來の戰局に於て大効果を現はし得べしと考らるゝ利器は、或は裝甲自動車に越ゆるものなかる可き歟。

從來自動車は既に久しき以前より、歐米にて工夫されたるが、從前のものは、現今東京にて三井吳服店の荷物用自動車の如く、街路を走るにパッパッパッ、ゴトゴト、と騷々しくして大なる響きをなせしが爲め、之を忌まれて其の流行遲々たりしなり、然るに爾來無響の機關が次第に發明せられ、遂に近來の如き非常の流行を見るに至れり。

繁榮なる市街にて、用ふべきものは、實に無響の機關を必要とす、故に其の運搬力も少なく、車輛の大さにも限ある譯なり、然れども戰地用の者は其の塲合を異にし、如何なる騷々しき響きを發し無作法に見ゆるとも、實用には左まで差支なき筈なり、故に其の運搬力を增大し、車輛の面積をも廣大にするは、甚だ容易の業にして、既に英國の如きも、山砲を裝置せる自動車を作り其の圖は、前きに戰時畫報にも掲げられたる程のことなり。

音響にも構はず、車輛の大さにも拘はらず、とすれば野砲と山砲との間に位する大砲をば容易に裝置し得べく、又其の裝甲も相應に厚き鋼板を用ゐて、小銃の彈丸を十分に防ぎ得べき者なり。

左すれば、野戰に在て此車は實に恐るべき利器たるべし、第一に其の運動の迅速なるは、馬に駕したる通例の砲車の及ぶべきにあらず、騎兵の如きは稍や其の速力を之に比すべしと雖も、其の銃丸は此の裝甲車を貫穿する能はざれば、無論之れに敵すべくもあらず、故に此の自動砲車は遠距離より、散彈、榴散彈を以て、自由に彼等を掃ひ斃し得べし且つ其の進退の機敏なることも、或は騎兵の上に出づべし、況や通常步兵隊の如きは、此の裝甲車に向て豆粒程の銃丸を注ぐとも、何の効力もなかるべきをや、故に自動砲車が迅速の運動を以て、或は正面より或は側面より、縱横自在に砲撃を加ふることあらば、步兵隊は遂に之を如何ともする能はざるべし。

若し峻嶮なる山地以外に於て、此の裝甲自動車の砲隊が、二三十輛も現出し來らんには、步騎兩兵の力は、殆ど之に抗すること能はざらむ、唯山砲野砲のみは、之に對敵し得べしと雖も、又到底大切なる進退迅速の點に於ては、之に一着を輸せざるを得ざるべし。

加之ならず、自動砲車は、時として偵察に用ゐ得べく、又時としては側面迂回に用ゐ得べく、種々の方面に於て、其の利便なること、殆ど案外至極なるものあらむ、此の砲車隊に向て大なる妨害となるべきものは、獨り溝塹、河川なりと雖も、若し此の砲隊に附するに又自動車輛を以てし、之に架橋用具を積載せしめ、常に進退を共にせしめば、通例の河川溝塹に向ては、忽ちに假橋梁を設け得べく、之を通過し了れば、又之を車輛に積載せしむることゝせば、大抵の地形に於て此の砲車隊は進退の駈引を失するにも至らざるべし。

遼東以北は廣濶の平野に富めり、秋冬の期節は土地乾燥し、自動車を用るの便宜は、益々增加す、若し日露兩軍の中にて、孰れの一方か是種の砲車を利用する

○高麗門附近の絶景

軍用電線に沿ふて我軍隊の行進するところ

(六月十一日…社友岡本月村子寫生)

者あらば、或は意外の奇勝を博せざるに限らざるべし、且つは將來の經驗ともなる譯なれば、我軍に於ては、盛に此の裝甲せる自動砲車を用ゐ見度く思はる。

又自動車は、獨り攻擊用の砲車として、用ゐ得べきのみならず、負傷兵の運搬に最も必用なるべく、現に英國の如きは、既に其の試驗中に在りと聞く、敵前に於て、數多の負傷者を迂遠遲鈍なる擔架等にて運搬するに比すれば、大形なる自動車に積載するの便は云ふ可らざるものあらん、運搬速迅にして、傷者苦痛の時間を減ずべく、又傷所の治療に手後れの恐れも減ずべきなり。

但し是種の砲車は、壘塞の攻擊には、不向きなること、勿論なりと雖も、第一には大野に於ける會戰、第二には强行斥候掩護の砲隊として、案外有効なるものにはあらざる歟、軍用とすべき自動車一輛の費用は高の知れたる者なり、百輛を備ふるとするも巨費を要せず然れば敵の之を用ふるに先ち、我軍に於ては、十分に試驗したく思はる、其向の人々は、定めて是等の注意を怠り居らざるべければ、我は其の實用を見るの日あるべしと樂み居るものなり。

▲鐵路の必要

旅順陷落も、既に遲速の問題となり、東は鴨綠江より西は營口に至る迄、我軍の占領すること、最早や遠からざるべし、然る上は直に軍事上必要の處分として、支那政府に照會し、又は事後承諾を得るつもりにて、早速に義州より東淸鐵道に連絡する一線の本鐵道を築造するを急務とす、右は其の里數も甚だ長からず、又將來我が貿易の繁榮に缺くべからざるものとす、斯くすれば將來歐洲より東洋に達する捷路は、露京より起て東淸鐵道（是線は戰後は無論露國の手を離るべき者とす）に至り、此線を前記の義營鐵道に連ね、京義鐵道を京釜に連ねば、歐亞の捷路は露京より朝鮮半島を通過し釜山に到て止るべし、左すれば將來釜山は東西兩洋の埠頭となり、旅客及び貿易上の便宜は我國に取て非常なること勿論なり、又日淸間の往來も、釜山より汽車にて直に北京に達するを得べく、其の便宜云ふべからず。

加ふるに將來一朝有事の日には、我は此の自國經營の鐵路に由り、何時にても軍隊を滿淸の野に輸送し得べし、斯くしてこそ、始て我國は滿韓一帶平和の保護者たるを得べし。

此の戰局は、尙ほ三四年の久しきに涉るものとすれば、釜山より東淸鐵道に聯結する線路は、戰時中に於ても亦た必要缺ぐべからざるものなり、故に何は扨置き、恰も義營間の鐵道建設の急務なることは、猶ほ京義鐵道、京釜鐵道、の必要なるが如きなり、是等も其筋にては、遠からず着手の心算あるを疑はず。

戰時畫報第拾五號目録

社告

編輯に關する御用は　新橋三千八百三十九番
御注文、廣告其の他の御用は　本局二千四百四十八番
へ御通知ありたし

近事畫報改題
每月三回 戰時畫報 發行

定價

冊數	定價	郵税
一冊	金十八錢	一錢五厘
三冊	前金五十錢	四錢五厘
六冊	前金九十六錢	九錢
十二冊	前金一圓八十六錢	十八錢

○御注文は總て前金の事○郵劵代用は一割增の事○郵劵は五厘、一錢又は二錢に限る

廣告料

等級	一頁	半頁	一行
特別	四十圓	二十五圓	六十錢
一等	三十五圓	十八圓	五十錢
二等	三十圓	十六圓	四十錢
摘要	五號活字一行二十八字詰一頁七十六行○廣告料前金の事		

廣告取次　東京神田區千代田町　博報堂

明治三十七年七月十七日印刷
明治三十七年七月二十日發行

編輯者　東京市芝區櫻田本鄉町十七番地　國木田哲夫　電話新橋三八三九番
發行者　東京市京橋區疊町一番地　柴田勝文
印刷者　東京市神田區錦町三丁目三番地　長谷川辰二郎
印刷所　東京市神田區錦町三丁目一番地　小川印刷所
發行所　東京市京橋區疊町一番地　近事畫報社　電話本局二四四八番